

本調査研究における「個に応じた指導」のとらえ方 **中学校国語科**

生徒全員が参加する授業づくり

研究テーマ

「生徒一人一人に学ぶ楽しさを味わわせる古文における音読指導の工夫・改善」

研究の視点

- 1 一人一人の生徒のつまづきを克服するための、古文の指導の在り方。
- 2 一人一人の生徒を高めるためのきめ細かな評価と具体的手立ての在り方。
- 3 語彙力や漢字力を付けさせるための言語事項の指導法の在り方。

調査研究の手だてと実践事例

- 1 「扇の的 - 『平家物語』から -」
- 「扇の的」の音読練習
 - ・ 追い読み、通し読み、同時通訳読み
 - 音読のグループごとの聞き合い
 - ・ 良い点を認め合うための相互評価

- 2 「今に生きる言葉 - 『故事成語』 -」
- 「矛盾」の音読と内容の理解
 - ・ 書き下し文と現代語訳の交代読み
 - 「推敲」等、他の故事成語の由来や意味用例を考えての短文づくり
 - ・ ワークシートの活用

- 3 「夏草 - 『おくのほそ道』から -」
- 冒頭部の音読、暗唱テスト
 - ・ 評価の観点の明示と相互評価
 - 「平泉」の音読と内容理解
 - ・ 古語辞典と脚注による現代語訳

- 4 「物語の味わい『竹取物語』」
- 歴史的仮名遣いの確認
 - ・ 音読プリントへの書き込み
 - 冒頭部の音読練習
 - ・ 交代読み、通し読み、一斉読み、スピード読み、ペア読み

☆成果 と ★課題

☆平家物語に親しませるための導入の工夫と、学習意欲の継続。
★歴史的仮名遣い等、古文の基礎的言語事項の徹底と時間の確保。

☆音読の継続による、古典に対する抵抗感の減少。
★歴史的仮名遣いに対する知識の定着と効果的な反復練習方法の工夫。

☆音読・暗唱の、一人一人の学びの差に応じた目標の設定。
★学び取ったことを、自分の言葉で表現させるための表現力の習得。

☆リズムや言葉の響き等の、声に出して読むことの効果の実感。
★考えたり理解したりした内容を整理したり表現するための知識や技能の習得。

教材名をクリックすると該当の指導案に行くことができます。

国 語

1 はじめに

平成15年12月に学習指導要領が一部改正され、個別指導やグループ別指導、繰り返し指導に加え、学習内容の習熟の程度に応じた指導、児童の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導を含めた「個に応じた指導」の一層の充実が示された。このことは、各学校の裁量により、子どもの実態に応じて創意工夫を凝らした指導が、より一層できるようになったということを示している。

そこで、今回はこれからの時代に求められる国語力を高めていくために、国語科における「個に応じた指導」として、生徒一人一人の特性を十分に理解し、生徒の個に応じたきめ細かな指導を充実するために、学習計画や指導方法・指導体制を工夫・改善していくこととした。その実現のため、下記のような研究の視点で調査研究を行った。

2 調査研究の視点

国語科における学習内容の基礎・基本の確実な定着を図るために、授業実践を通して、「個に応じた指導」を充実させるための指導方法の工夫・改善に関して調査研究を行う。

- (1) 一人一人の生徒のつまずきを克服するための、古文の指導の在り方について検証する。
(古文における音読指導の在り方)
- (2) 一人一人の生徒を高めるための評価と手立ての在り方について検証する。
(きめ細かな評価と具体的手立て)
- (3) 語彙力や漢字力を付けさせるための言語事項の指導方法の在り方について検証する。
(授業導入時における漢字小テスト・暗唱テストの工夫など)

3 研究テーマ

『生徒一人一人に学ぶ楽しさを味わわせる古文における音読指導の工夫・改善』

(1) 研究テーマ設定の理由

古典というと、生徒たちはややもすると「意味が分からない」、「難しい」などを理由にして敬遠する傾向にある。しかし、中学校学習指導要領でも「古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てる」と述べているように、古典の学習は、「古典への親しみや関心を深める」ことを、その目標としなければならない。生徒たちが敬遠するその理由の裏には、古典の指導が文法的に細部にわたっていたり、知識を注入するだけの指導に陥ってしまっていたりしたのではないかという疑問を、ぬぐうことができないのも事実である。

そこで、今回の調査研究では、古典の中でも特に古文に焦点を絞り、音読指導を中心に位置付け、その指導の在り方について研究を深めることとした。埼玉県内の全小中学校が取り組んでいる「教育に関する3つの達成目標」の「読む・書く」においても、『竹取物語』(中学校1年生)、『平家物語』『おくのほそ道』(中学校2・3年生)等を、すらすらと音読できるようにしましょう。」とあるように、音読の重要性について繰り返し述べているところでもある。

音読に重点的に取り組むことにより、作品のもつリズムや響きを感じ取り、文章の内容や優れた表現を味わうことができるようになることを考える。また、その指導を積み重ねることにより、古典に親しむ態度を養うことができると考え、本テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るための方策

①生徒全員参加の授業づくり

今回の調査研究では、「個に応じた指導」を「生徒全員が参加できる授業づくり」ととらえた。県内の中学校の国語の授業では、少人数指導に取り組んでいる学校も、散見され

るようになってきてはいるが、現実的には少人数指導を行うことが困難な学校の方が、圧倒的に多い。そこで、少人数指導ではなくても、一斉指導の中で一人一人の生徒が意欲をもって授業に取り組むことができるようにするためには、どのような手立てをもって指導すれば効果的であるのか、また、一人一人の生徒のつまずきを発見し、克服するためにはどのような指導が有効であるのかを探ることとした。

古文を生徒全員がすらすらと音読することができるようにするための指導とはどのようなものであるのか。生徒全員が、古文に対し苦手意識をもつことなく、古文を身近なものと感じ親しみを持つことができるようにするための指導法とはどのようなものであるのか。その指導法を探ることが、すなわち、生徒一人一人の個に応じた指導の在り方を探ることにも通ずると考え、調査研究を行うこととした。

②一人一人の生徒を高めるためのきめ細かな評価と具体的手立て

全員参加の授業を目指すためには、一人一人の生徒がどこまでできていて、どこからできないのかを把握することが何より重要である。そのためには、適切な評価規準を設定し、きめ細かな評価を行うこと肝要である。また、評価することが目的ではなく、その評価をもとに、次にどのような指導を行うのかを見通しておかなければならない。評価規準に達していない生徒については、評価規準に達するための具体的な手立てを、達している生徒については、「十分に満足できる」状況に高めるための手立てを、「十分に満足できる」状況の生徒についても、より高められるような指導の手立てをあらかじめ準備し、積み重ねてゆかなければならない。それが「個に応じた指導」であり、全員参加の授業につながるのである。

今回の調査研究では、学習指導案の「6本時の学習指導」「(3)展開」の中に、評価場面ごとに『☆個に応じた指導の工夫部分』として、評価の際にそれぞれの段階に応じた、生徒を高めるための具体的手立てを記載することとした。一人一人の生徒のつまずきを発見し、より高めるための具体的手立てをとることにより、「個に応じた指導」ができると考える。

個に応じた手だてシート
2年

「扇的的 -『平家物語』-

平成18年11月 9日(木)
第3校時 10:50~11:40 (50分)

今日の授業の目標

・古文特有の表現に注意しながら「扇的的」の前半部分を音読する。

使用する教材・教具

教師 教科書・ワークシート・掲示物・
ストップウォッチ
生徒 教科書・ワークシート

授業の流れ

- 1 冒頭部分の暗唱
- 2 本時の目標確認
- 3 原文の範読
- 4 追い読み
- 5 通し読み
- 6 対句法・係り結びの確認
- 7 口語訳完成
- 8 同時通訳読み
- 9 個人練習
- 10 生活班で相互評価
- 11 次時の予告

個に応じた具体的な手だて

- 1 ①自信のない部分はプリントを
みてもよいこととする。
2 ①準備のできた生徒は、読み方を
自分なりに予想させる。
3 ①自分自身が音読練習をするに
必要な書き込みをさせる。
②聞き取れなかった部分は質問
させる。
4 ①生徒の読みをよく聴き、読み始
めのタイミングを調節する。
7 ①終わった生徒は、唇読で同時通
訳読みをしているように指示
しておく。
②作業終了時に「まだ終わってい
ない人」と問いかけ、全員の
作業が終了したことを確認す
る。
9 ①読み終わった者も時間いっぱ
い練習を繰り返すよう指示す
る。
②机間指導を通して、さらに読み
の質を高める。(言葉の句切り
イントネーション等)
10 ①各自の音読の良い点を中心に
評価し、読み手がより良い音読
ができるようにアドバイスす
る。

評価の規準

ア②古文の特徴を意識し
ながら進んで音読しよ
うとしている。
・音読や暗唱の様子
ウ①口語訳を参考にしな
がら古文の大意をつか
んでいる。
・プリント記入の様子
・同時通訳読みの様子

オ①歴史的仮名遣いを意
識して音読している。
オ②七五調の文体による
古文のリズムを意識し
て音読している。
・音読の様子

Aの生徒に対する手立て
暗唱を目指し、できるだ
け本文を見ないで音読さ
せる。

Bの生徒に対する手立て
古文の意味に即して、間
の取り方・リズム等を意
識して音読させる。

Cの生徒に対する手立て
歴史的仮名遣い・難読語
句の読み方を再度確認さ
せ、正確に音読できるよ
うに練習させる。

第2学年1組 国語科学習指導案

平成18年11月9日(木)

指導者 ○○ ○○

1 教材名

「扇の的 — 「平家物語」から — 」

2 児童・生徒の思いや願いと本教材の意図

生徒は、古典に対して、「難しい、めんどくさい、読みにくくて嫌だ、意味がわからない」といったマイナス感情を抱きがちである。これは、歴史的仮名遣い・現在は使われていない言葉、主語の省略といった古文特有の表現に対する抵抗が強いためである。しかし、いざ学習が進み、繰り返し音読することと口語訳や補助資料の効果的活用によって、この言葉自体への抵抗が薄らいでくると、古文特有のリズムや言葉の響きに魅せられ、進んで暗唱しようとする生徒が増えてくる。また、昔の人のものの見方や考え方に新鮮さを感じ、自分からその時代の文化を調べたり、小中学生向けの古典の読み物を読んだりする生徒も増えてくる。中学校の段階では、いかに古典に対する言葉の抵抗を取り除き、親しみを持たせることができるかが鍵となる。一人でも多くの古典好きの生徒を生み出すことが中学校国語教師の役割であると考えている。

本学級の生徒は、国語に対する学習意欲が高く、既習の「枕草子冒頭文」においても、積極的に暗唱に挑戦する生徒が多かった。今回の学習では、さらに音読の力を高め、音読によって内容の理解を進めたい。

本教材は、鎌倉時代に成立した軍記物語である。和漢混淆文の特徴である和文脈のやわらかさと漢文訓読調の硬い響きが溶け合って独特のリズムを作り出している。また、七五調に近い部分や対句表現、係り結びの配置等さまざまな工夫によって、全編が歌うような調子で流れている。まずは、NHKの「日本語であそぼ」でも取り上げられた冒頭文の学習で、音読そのものの心地よさに浸らせたい。次に、「扇の的」は、視覚に訴える表現（夕日を背景に扇が空に舞う場面）や聴覚に訴える表現（矢の飛ぶ音）などを駆使し臨場感を高めている。生徒には、表現に即して豊かに場面をイメージさせたい。こうした段階を踏んで、最後に、那須与一の心情を想像させることにより、武士としてのものの考え方と一人の人間としての感じ方の違いをつかませたい。そのために、現代語で書かれた与一の的を射るまでの部分と、古文の黒革をどしの老武者を射殺した部分を比較して読ませることによって、この作品に表れた光と陰の両面をつかませ、読みを深めさせたい。

3 教材の目標

(1) 「平家物語」に関心を持ち、自ら進んで音読しようとしている。

(関心・意欲・態度)

(2) 場面の状況を読み取り、その場におかれた人物の心情を読み取ることができる。

(読むこと)

(3) 古語の意味を理解し、言葉の調子や間の取り方に注意して音読することができる。

(言語事項)

4 教材の評価規準と学習活動における具体的評価規準

	ア国語への関心・意欲・態度	ウ読むこと	オ言語についての知識・理解・技能
教材評価規準	○「平家物語」に関心を持ち、自ら進んで音読しようとしている。	○繰り返し音読することを通して、それぞれの人物がおかれた立場を理解し、自分なりの感想をもっている。	○「平家物語」を読む上での基礎知識や表現方法、語句の意味、独特の言い回し、仮名遣いなどを理解して音読している。
学習具活体動のにおお評価規準	①「平家物語」に関心を持ち、進んで内容にふれようとしている。 ②古文の特徴を意識しながら進んで音読しようとしている。	①口語訳を参考にしながら古文の大意をつかんでいる。 ②口語訳を参考にしながら、登場人物の心情をとらえている。	①歴史的仮名遣いを意識して音読している。 ②七五調の文体による古文のリズムを意識して音読している。

5 指導と評価の計画（全6時間）本時 3 / 6時間

時	主な学習活動・学習内容	評価規準・評価方法
1	○「平家物語」の概略をつかみ、冒頭部分を繰り返し音読する。 ・「平家物語」について知っていることを話し合う。 ・冒頭部分の範読を聞く。 ・冒頭部分を繰り返し音読する。 ・冒頭部分の表現の特徴をつかむ。 ・冒頭部分から「平家物語」全編を貫く無常観をつかむ。	◎ア① ア② オ① オ② ・発表の様子 ・ノートへの書き込みと整理
2	○資料を通して「扇の的」の場面に至るまでの源平合戦の流れをつかむ。 ・資料集やワークを読み、源平合戦のあらましをつかむ。 ・「扇の的」の範読を聞く。 ・「扇の的」の口語訳を読む。 ・アニメビデオ「平家物語」を視聴して「平家物語」全体の流れを理解する。 ・ビデオ視聴を通して「扇の的」の場面のイメージを大まかにつかむ。	◎ア① ・ビデオ視聴の態度や資料を調べる様子
3 本時	○文語文特有の表現に注意しながら、「扇の的」を音読する。 ・「ころは二月～扇も射よげにぞなったりける」までの原文の範読を聞く。 ・「ころは二月～扇も射よげにぞなったりける」までの原文を繰り返し音読する。(追い読み・斉読) ・対句法と係り結びについて知る。 ・ワークシート①に表現の特徴を書き込む。 <u>対句法・係り結び</u>	◎ア② オ① オ② ウ① ・音読の様子 ・メッセージカードへの書き込み ・プリントへの書き込みと整理

	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート①の口語訳を完成させる。 ・口語訳の確認を含め、同時通訳読みを行う。 (①教師[口語訳]→生徒[古文]の形で2回) ・この部分の内容を踏まえ、個人で音読の練習を繰り返す。 ・4人程度のグループで相互に音読を聞き合う。 	
4	<ul style="list-style-type: none"> ○前半部分を読んで、那須与一が扇を射るまでの心情をつかむ。 ・プリント①の冒頭の現代文の部分を読んで、扇的を射ることになった経緯をつかむ。 ・与一が扇を射ることをはじめは辞退した理由を考える。 ・一度は辞退した与一が結局的を射ることになった理由を考える。 ・味方である源氏の人々はどのような思いで与一を見つめていたかを考える。 ・的を射る直前の与一の心情を想像する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ア② ウ② オ① オ② ・音読の様子 ・プリントへの書き込みと整理
5	<ul style="list-style-type: none"> ○与一が的を射る前後の様子を表現に即して想像する。 ・「与一、かぶらを取つて～たたいてどよめきけり」までの原文の範読を聞く。 ・「与一、かぶらを取つて～たたいてどよめきけり」までを繰り返し音読する。 (追い読み・斉読・個人練習) ・ワークシート③に表現の特徴を記入する。 [対句法・係り結び・擬音語] ・ワークシート③の口語訳を完成させる。 ・口語訳の確認を含め、同時通訳読みを行う。 (教師[口語訳]→生徒[古文]) ・与一が的を射る様子をプリントでまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ア② ウ① オ① オ② ・音読の様子 ・プリントへの書き込みと整理
6	<ul style="list-style-type: none"> ○後半部分を読んで、源氏と平家のものの考え方の違いをつかむ。 ・「あまりのおもしろさに～「情けなし」と言ふ者もあり。」までの原文の範読を聞く。 ・「あまりのおもしろさに～「情けなし」と言ふ者もあり。」までを音読する。 ・ワークシート④に表現の特徴を書き込む。 [対句法・係り結び・擬音語] ・ワークシート④口語訳を完成させる。 ・口語訳の確認を含め、同時通訳読みを行う。 (教師[口語訳]→生徒[古文]) ・「黒革をどしの鎧」の男が射殺された場面について、自分の考えをノートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ア② ウ① ウ② オ① オ② ・音読の様子 ・プリントへの書き込みと整理

6 本時の学習指導 (本時 3 / 6 時間)

(1) 目 標 古文特有の表現に注意しながら「扇的」の前半部分を音読する。

(2) 評価規準

ア国語への関心・意欲・態度	ウ読むこと	オ言語についての知識・理解・技能
②古文の特徴を意識しながら進んで音読しようとしている。	①口語訳を参考にしながら古文の大意をつかんでいる。	①歴史的仮名遣いを意識して音読している。 ②七五調の文体による古文のリズムを意識して音読している。

(3) 展開

前時の学習内容	○資料を通して「扇の的」の場面に至るまでの源平合戦の流れをつかむ。
---------	-----------------------------------

学 習 活 動 ・ [学 習 内 容]	指導・援助と評価の創意工夫 ☆…個に応じた指導の工夫部分	分
①冒頭部分の暗唱（2回）	○できるだけプリントを見させない。 ☆自信のない部分は見てもよいこととする。 ア② ・暗唱の様子	1
②本時の目標確認 古文特有の表現に注意しながら「扇の的」の前半部分を音読する。	○ワークシート①を配布し、目標部分をマーカーで塗らせる。 ○ワークシート①の古文の部分をマーカーで塗らせる。 ☆準備のできた生徒は、読み方を予想させる。	3
③「ころは二月～扇も射よげにぞなったりける」までの原文の範読を聞く。	☆筆記用具を持たせ、自分で音読練習をするために、読み方の分からない部分について書き込みをさせる。 ☆聴き取れなかった部分について質問をするように指示する。	4
④句読点で区切って追い読みをする。（3回）	ア② ・音読の様子 オ① ・音読の様子 オ② ・音読の様子 ○テンポを大事にするため、生徒が読み終わる寸前に次のフレーズを読み始める。	6
⑤通し読みをする。 （教師と一緒に2回、生徒だけで1回）	☆生徒の音読をよく聴き、読む速さを調節する。	3
⑥対句法と係り結びについて知る。 対句法…言葉の並べ方を同じにして、意味は対になる表現技法。反復法と区別する。 舟は、揺り上げ揺りすゑ漂へば 扇もくしに定まらずひらめいたり。 沖には平家、舟を一面に並べて～ 陸には源氏、くつばみを並べて～ 係り結び…文中に（ぞ・なむ・や・か・こそ）	○対句法と係り結びについてまとめた掲示物を呈示する。 ○本文の中でどこに対句法と係り結びが使われているかを見つけさせる。	3

<p>がある場合は、文末が通常とは別の形に変わる。</p> <p>〔晴れならずと言ふことぞ—なき 扇も射よげにぞなったりける〕</p>		
<p>⑦ワークシート①の口語訳を完成させる。</p>	<p>○句読点ごとに、古文と口語訳を交互に見て言葉の意味をつかませる。 ☆終わった生徒は、唇読で同時通訳読みをしているように指示しておく。 ☆作業終了時に「まだ終わっていない人」と問いかけ、全員の作業が終了したことを確認する。 ウ① ・プリント記入の様子</p>	8
<p>⑧全員で同時通訳読みを行う。 (①教師口語訳→生徒古文の形で2回)</p>	<p>ウ① ・同時通訳読みの様子</p>	5
<p>⑨内容を理解した上で個人練習を行わせる。</p>	<p>・3回読むことを目標にさせる。 ☆読み終わった者も時間いっぱい練習を繰り返すよう指示する。 ☆机間指導を通して、さらに読みの質を高める。(言葉の句切り・イントネーション等)</p>	4
<p>⑩音読(暗唱)を聞き合う。</p>	<p>オ① ・机間指導による音読の観察 オ② ・机間指導による音読の観察 ・生活班を二分し最大4人のグループで聴き合いをさせる。 ☆各自の音読のよい点を中心に評価し、読み手がよりよい音読ができるようにアドバイスをする</p> <p>— ☆評価場面 —</p> <p>Aの生徒に対する手立て 暗唱を目指し、できるだけ本文を見ないで音読させる。 Bの生徒に対する手立て 古文の意味に即して、間の取り方・リズム等を意識して音読させる。 Cの生徒に対する手立て 歴史的仮名遣い・難読語句の読み方を再度確認させ、正確に音読できるように練習させる。</p>	12
<p>⑪次時の予告を聞く。</p>		1

<p>次時の学習内容</p>	<p>○前半部分を読んで、那須与一が扇を射るまでの心情をつかむ。</p>
----------------	--------------------------------------

備考 男子17名 女子16名 計33名

7 成果と課題

・ 成果

第一に、今回の学習では、導入部分で平曲を交えたアニメビデオを見せたり、さまざまな資料を活用したりすることによって、まずは平家物語そのものへの興味を持たせる努力をした。その結果、場面全体のイメージが大まかにつかめているため、生徒は安心して本文に入っていくことができた。生徒にとって、古文は言葉の上での抵抗が大きいことを考慮し、まずは、イメージ作りを先に行うことから無理なく古文の世界に誘うことの大切さを改めて感じた。

第二に、ワークシートを工夫することによって学習の円滑化が図れたことが成果として挙げられる。ワークシート作成の視点としては、①学習の流れがわかること、②その日に学習した内容（言語技術）が一目でわかること、③穴埋め等の活用により、国語が苦手な生徒でも、無理なくトレーニングを続けることができること、④一つはじっくりと考える課題を入れ、国語が得意な生徒に深くものを考えさせることができることを考えた。一斉授業の中で、個々の生徒の能力に応じたワークシートを作ることは難しい作業であるが、個別の支援をきめ細かにできるように工夫を重ねていきたい。

また、教師の範読が生徒を引きつける一つの要素となると考え、範読用のCDをよく聴き、自分なりの音読のイメージを持った上で、ストップウォッチを片手に練習を繰り返した。CD等の借り物に頼ることなく、自らが「平家物語」特有のリズムや言葉の力強さを理解した上で一つの例を呈示することによって、生徒の読みに対する集中力やよりよい音読を目指そうとする意欲を喚起することができた。教師にとっての音読練習は、古典の指導において欠くことのできない教材研究であると実感した。

更に、追い読み、個人練習、二人読み、同時通訳読み等のさまざまな音読のパターンを取り入れることにより、トレーニング効果が高まり、歴史的仮名遣い等、古文特有の表現に慣れ、進んで古文を音読しようとする意欲が高まってきた。また、音読を数多く繰り返した生徒は、更に暗唱に挑戦しようとする姿が見られた。音読に対する意欲の高まりに伴って内容の理解度も高まり、古文への親しみが増してきたことが成果として挙げられる。

・ 課題

「平家物語」の学習を終え、歴史的仮名遣いの箇所を取り上げてテストをしてみると、音読はできていたが、文字として現代仮名遣いに直すことが正確にできていない生徒がクラスで数名見られた。歴史的仮名遣い等言語事項に関する取り立て指導を強化していかねばならないと感じた。

評価については、さらに評価基準を明確にし、A・B・Cそれぞれの評価段階の生徒に更なる高みを目指して努力するための個別の支援をしていかねばならない。まずは、評価Cの生徒に個別の支援をする時間を一斉授業の中でいかに確保していくかを考え、1時間の授業の組み立てを工夫していきたい。又、評価Aの生徒には、より高度な課題を設定するためのヒントをいかに与えていくか、支援の方法を考えていきたい。今後の一つの方向性としては、評価Aの生徒が先に進むだけでなく、仲間を支援していくことでさらに自分の学習を深めていく小先生としての力量をつけさせていくことを考えている。全員が参加し、全員が自らの学びを実感できる授業を目指して、さらに工夫を重ねていきたい。

軍記物語 『平家物語(冒頭文)』2年()組()番()
○冒頭文を読んで、平家物語全体をつらぬく考え方をつかむ。

「平家物語について」
成立 時代
作者
種類 物語 鎌倉・室町時代に、戦いを中心として叙事的に作られた物語。
◇和漢混交文(和文体と漢文訓読体がまじった独特の調子とリズムをもつ文体。
◇平曲として、琵琶法師によって語られ、広く民衆に親しまれた。
◇()と()の戦いを描いている。(教科書P117・ワークP68)

祇園精舎に鳴る鐘の音には、
祇園精舎の鐘の声、

この世は常なく万物すべてが移り変わっていくものだ、ということを示す響きがある。
諸行無常の響きあり。

釈迦がその下で亡くなったと伝えられる沙羅双樹の花の色は、
沙羅双樹の花の色、

盛んな者もいつかは必ず衰えるという深い道理を表している。
盛者必衰の理をあらはす。

人の身の上もこの通りで、栄華におごっている者も、それがいつまでもつづくわけではなく、
おごれる人も久しからず、

そのはかないことは春の夜の夢のようである。
ただ春の夜の夢のごとし。

勇猛な人もやがては滅び去っていつてしまうが、
たけき者もつひには滅びぬ、

それはちょうど風の前に漂う塵と同じなのである。
ひとへに風の前の塵に同じ。

「内容のまとめ」

祇園精舎の鐘の声、

諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、

盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、

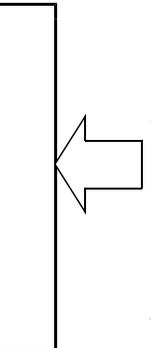
ただ春の夜の夢のごとし。

たけき者もつひには滅びぬ、

ひとへに風の前の塵に同じ。

表現技法【 】

表現技法【 】



この世にある全てのものは、絶え間なく移り変わっていて、不変のものはいらない。
大きな時の流れから見れば、人の一生もほんの一瞬のことではかないものだ。

軍記物語 『扇的』① 2年()組()番()
 ○古文特有の表現に注意しながら「扇的」の前半部分を音読する。

時は()

()のことであったが、

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、

折から【 】が()吹いて、岸を打つ【 】も()。

をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。

【 】は、揺り上げられ揺り落とされ上下に()、

舟は、揺り上げ揺りすゑ漂へば、

竿頭の【 】もそれにつれて()、しばらくも静止していない。

扇もくしに定まらずひらめいたり。

()には【 】が、海上二面に舟を並べて()。

沖には平家、舟を一面に並べて見物す。

()では【 】が、馬のくつわを連ねてこれを()。

陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。

どちらを見ても、まことに()である。

いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。

【 】は目を閉じて、

与一、目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が故郷の神々の、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、

願わくは、あの扇の真ん中を()。

願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。

これを射損じれば、弓を折り、()、再び人にまみえる心はありません。

これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず。

いま一度本国へ() (とおぼしめされるならば、この矢を外させたもうな。)

いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせたまふな。」

と()、目をかっと開いて見ると、

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、

うれしや【 】も少し()、的の【 】も静まって()。

風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなったりける。

表現技法「

対句法

言葉の並べ方を同じにして、意味は対(つい)になる表現技法。

「反復法(同じ語句を何度も繰り返す表現技法)」との区別をしっかりとつける。

対句法の例 鳥は歌い、風はささやく

反復法の例 鳥は歌う、鳥は歌う

係り結び

文中に(ぞ・なむ・や・か・こそ)がある場合は、文末が通常とは別の形に変わる。

通常の形	水	流る	(終止形)	水が流れる	
係り結び	変化	した形		文の意味	表現の効果
ぞ	水ぞ	流るる	(連体形)	水が流れる	強意
なむ	水なむ	流るる	(連体形)	水が流れる	強意
や	水や	流るる	(連体形)	水が流れるか(いや、流れない)	疑問・反語
か	水か	流るる	(連体形)	水が流れるか(いや、流れない)	疑問・反語
こそ	水こそ	流るれ	(已然形)	水が流れる	強意

反語

意味を強めるために、本心とは逆の内容を問いかける言い方。「〜であろうか。いやそうではない」

軍記物語『扇的』① 2年()組()番()
 ○古文特有の表現に注意しながら「扇的」の前半部分を音読する。

時は(二月十八日)、(午後六時ごろ)のことであったが、

ころは二月十八日の西の刻ばかりのことなるに、

折から【北風】が(激しく)吹いて、岸を打つ【波】も(高かった)。
 をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。

【舟】は、揺り上げられ揺り落とされ上下に(漂っている)ので、
 舟は、揺り上げ揺りすゑ漂へば、

竿頭の【扇】もそれにつれて(揺れ動き)、しばらくも静止していない。
 扇もくしに定まらず ひらめいたり。

(沖)には【平家】が、海上一面に舟を並べて(見物している)。
 沖には平家、舟を一面に並べて見物す。

(陸)では【源氏】が、馬のくつわを連ねてこれを(見守っている)。
 陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。

どちらを見ても、まことに(晴れがましい情景)である。
 いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。

【与一】は目を閉じて、
 与一、目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が故郷の神々の、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、
 「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、

願わくは、あの扇の真ん中を(射させたまえ)。
 願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。

これを射損じれば、弓を折り、(腹をかき切つて)、再び人にまみえる心はありません。
 これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず。

いま一度本国へ(帰そう)とおぼしめされるならば、この矢を外させたもうな。
 いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづせたまふな。

と(念じながら)、目をかっとないて見ると、
 と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、

うれしや【風】も少し(おさまり)、的の【扇】も静まって(射やすくなっていた)。
 風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなったりける。

表現技法「係り結び」

対句法

言葉の並べ方を同じにして、意味は対(つい)になる表現技法。

「反復法(同じ語句を何度も繰り返す表現技法)」との区別をしっかりとつける。

対句法の例 鳥は歌い、風はささやく

反復法の例 鳥は歌う、鳥は歌う

係り結び

文中に(ぞ・なむ・や・か・こそ)がある場合は、文末が通常とは別の形に変わる。

通常の形	水	流る	(終止形)	水	が	流れる	
係り結び	変化	した	形	文	の	意味	
ぞ	水ぞ	流るる	(連体形)	水	が	流れる	強意
なむ	水なむ	流るる	(連体形)	水	が	流れる	強意
や	水や	流るる	(連体形)	水	が	流れるか(いや、流れない)	疑問・反語
か	水か	流るる	(連体形)	水	が	流れるか(いや、流れない)	疑問・反語
こそ	水こそ	流るれ	(已然形)	水	が	流れる	強意

反語

意味を強めるために、本心とは逆の内容を問いかける言い方。「〜であろうか。いやそうではない」

○前半部分を読んで、那須与一が扇を射るまでの心情をつかもう。

日暮れを迎え、双方が陣をひきかけているところへ、沖の方から、小舟が一そう、みぎわへ向かってこぎ寄せてきた。「なんだろう。」と見ていると、舟の中から、年若い女房が姿を見せ、扇を竿の先に付けて舟端に立て、陸に向かって手招きをした。射よ、とのことのようにであった。義経は、下野国の住人、那須与一に命じて射させようとする。与一は、まだ二十歳前後の男であった。「てまえの力では及びませぬ。」と、一度は辞退する与一だったが、義経の命令は絶対であって、辞しがたく、「しからは、当たり前はとにかく、仰せのとおりつかまつりましょう。」と、御前を退き、黒のたくましい馬に鞍を置いて、またがった。弓を取り直し、手綱をかい繰り、みぎわへ向かって馬を歩ませると、味方のつわものどもは、「かの若者ならば、確かに射当てるに相違ない。」と、その後ろ姿をはるかに見送ったが、それは、義経も同じ思いだった。矢ころが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間余りはあると見えた。

① 那須与一が扇の的を射ることになったのは、なぜですか。
主君である [] が [] したから。

② 与一は、はじめ扇の的を射ることを辞退しましたが、それはなぜですか。
この場面の状況を(天候、船、的、的までの距離)等を根拠にして答えなさい。

- 風の様子
- 海の様子
- 舟の様子
- 的の様子
- 距離

これらの状況をまとめると

根拠 []
心情 [] がなかったから。 [] ので、

③ 一度は辞退した与一が、結局、的を射ることになったのはなぜですか。
理由 [] の [] は [] だから。

④ 源氏の人々は、どのような思いで、那須与一を見つめていましたか。源氏の人々の心情を表す会話を、現代文の中から書き抜きなさい。
心情 []

⑤ 那須与一は、最終的にどのような思いで、的を射ることにしましたか。
根拠(的を射る直前の様子)を明らかにして、与一の心情を想像してまとめなさい。

根拠 []
ことから、

心情 []

軍記物語 『扇的』③ 教科書P114 2年()組()番()
 ○扇を射落とした部分を読んで、その情景をつかむ。

<p>【は】かぶら矢を取ってつがえ、ひようと放った。 与一、かぶらを取ってつがひ、よっぴいてひやうど放つ。表現技法「</p>	<p>「</p>
<p>小兵とはいふぢやう、十二束三伏、弓は強し、</p>	<p>「</p>
<p>浦響くほど長鳴りして、</p>	<p>「</p>
<p>あやまたず扇の要から一寸ほど離れたところをひいふつと</p>	<p>。表現技法「</p>
<p>あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。</p>	<p>「</p>
<p>かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。表現技法「</p>	<p>「</p>
<p>しばしは虚空にひらめきけるが、</p>	<p>「</p>
<p>【は】春風に一もみ二もみもまれて、</p>	<p>。さつと散り落ちた。表現技法「</p>
<p>夕日に輝く白い波の上に、金の日輪を描いた真つ赤な</p>	<p>。表現技法「</p>
<p>沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、</p>	<p>。表現技法「</p>
<p>陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。</p>	<p>。表現技法「</p>

1 この文章の中の「擬音語」を二つ指摘してみましよう。
 擬音語：実際の音(声)をまねて言葉とした語。例「さらさら」「ざざざあ」「わんわん」

2 古文では、主語が省略されることがよくあります。省略された主語を補っていくことによって、文章の流れがつかめます。今日の文章の中で、「何が」そうになっているのかを補ってみましよう。
 主語：「何(だれ)が」どうする(どんなだ・何だ)。」という主語述語の関係を表す文の中で「何が」「だれが」にあたる言葉

<p>3 かぶら矢と扇の様子がわかる表現を時間の流れに沿って、古文から抜き出してみよう。 かぶら矢の様子がわかる表現</p>	<p>扇の様子がわかる表現</p>
<p>① かぶらを取ってつがひ、</p>	<p>① 扇は</p>
<p>② 浦響くほど長鳴りして、</p>	<p>② 春風に一もみ二もみもまれて、</p>
<p>③ 浦響くほど長鳴りして、</p>	<p>③ 春風に一もみ二もみもまれて、</p>
<p>④ かぶらは</p>	<p>④</p>

【与一】は、かぶら矢を取ってつがえ、ひようと放った。
 与一、かぶらを取ってつがひ、よつびいてひやうど放つ。 表現技法「擬音語」

小兵とはいいなながら、【矢】は十二束三伏、【弓】は強い、
 小兵といふぢやう、十二束三伏、弓は強し、

【かぶら矢】は、浦一帯に鳴り響くほど長いうなりを立てて、
 浦響くほど長鳴りして、

あやまたず扇の要から一寸ほど離れたところをひいふつと(射切った)。 表現技法「擬音語」「係り結び」
 あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。 表現技法「擬音語」「係り結び」

【かぶら矢】は飛んで(海)へ落ち、【扇】は(空)へと舞い上がった。
 かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。 表現技法「対句法」「係り結び」

【扇】はしばしの間(空に)舞っていたが、
 しばしは虚空にひらめきけるが、

【扇】は春風に一もみ二もみもまれて、(海へ)さつと散り落ちた。
 春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。 表現技法「係り結び」

夕日に輝く白い波の上に、金の日輪を描いた真つ赤な【扇】が
 夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、
 漂つて、浮きつ沈みつ揺れているのを、

白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、
 (沖)では【平家】が、舟端をたたいて(感嘆し)、

沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、
 (陸)では【源氏】が、えびらをたたいて(はやしたてた)。 表現技法「対句法」

1 この文章の中の表現技法を指摘してみましよう。(対句法・係り結び・擬音語)
 擬音語：実際の音(声)をまねて言葉とした語。 例「さらさら」「ざあざあ」「わんわん」

2 古文では、主語が省略されることがよくあります。省略された主語を補っていくことによって、文章の流れがつかめます。今日の文章の中で、「何が」そうになっているのかを補ってみましよう。
 主語：「何(だれ)が」どうする(どんなだ・何だ)。」という主語述語の関係を表す文の中で「何が」「だれが」にあたる言葉

3 かぶら矢と扇の様子がわかる表現を時間の流れに沿って、古文から抜き出してみよう。

<p>かぶら矢の様子がわかる表現</p> <p>① かぶらを取ってつがひ、</p> <p>② よつびいてひやうど放つ。</p> <p>③ 浦響くほど長なりして、</p> <p>④ 扇の要ぎは一寸ばかりおいてひいふつとぞ射切つたる。</p> <p>⑤ かぶらは海へ入りければ、</p>	<p>扇の様子がわかる表現</p> <p>① 扇は空へぞ上がりける。</p> <p>② しばしは虚空にひらめきけるが、</p> <p>③ 春風に一もみ二もみもまれて、</p> <p>④ 海へさつとぞ散つたりける。</p>
---	--

軍記物語 『扇的』④ 教科書P115 2年()組()番()
○後半部分を読んで、黒革おどしの武者を討つたことに対するそれぞれの人の考えをつかむ。

あまりのおもしろさに、()

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、()

舟の中から、年のころ五十歳ばかり、

舟のうちより、年五十ばかりなる男の、おのこ

黒革おどしの鎧を着、白柄の長刀を持った()が、

黒革をどしの鎧を着て、白柄の長刀を持ったるが、

【**の**】立ててあった所に立って ()

扇を立てたりける所に立って 舞ひしめたり。

そのとき、【**が**】伊勢三郎義盛、与一の後ろへ馬を歩ませせてきて、

伊勢三郎義盛、与一の後ろへ歩ませ寄つて、

「御定であるぞ、射よ。」と

「御定ぞ、つかまつれ。」と言ひければ、

【**は**】今度は中差を取って ()

()、十分に引き絞って、

今度は中差を取つてうちくはせ、よつぴいて、

男の頸の骨をひようふつと射て、

しや頸の骨をひやうふつと射て、

表現技法「

舟底へ真つ逆さまに射倒した。

舟底へ逆さまに射倒す。

【**は**】は静まり返って ()

平家の方には音もせず、

【**は**】は今度もえびらをたたいて ()

表現技法「

源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。

「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、

「情けなし。」と言ふ者もあつた。

表現技法「

「情けなし。」と言ふ者もあり。

1 年五十ばかりなる男は、いくさの場であるのに、なぜ舞を舞つたりしたのでしょうか？

から。

2 那須与一は、なぜ舞を舞っている男を射殺したのですか？

から。

3 那須与一は、本当はどのような思いを抱いていたのでしょうか？ 想像してみましょう。

4 「あ、射たり。」と言った人々はどのような思いを抱いたのでしょうか？

5 「情けなし。」と言った人々はどのような思いを抱いたのでしょうか？

軍記物語 『扇的』④ 2年（ ）組（ ）番（ ）
○後半部分を読んで、黒革おどしの老武者を討つたことに対する考えをつかむ。

あまりのおもしろさに、(感に堪えなかったのであろう)、
あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、

舟の中から、年のころ五十歳ばかり、
舟のうちより、年五十ばかりなる男の、

黒革おどしの鎧を^着、白柄の長刀^を持った【男】が、
黒革をどしの鎧^を着て、白柄の長刀^を持ったるが、

扇^の立ててあった所に立って(舞を舞った)。

扇^を立てたりける所に立って舞ひしめたり。

そのとき、【伊勢三郎義盛】が、那須与一の後ろへ馬を歩ませてきて、

伊勢三郎義盛、与一^の後ろへ歩ませ寄つて、

「御定であるぞ、射よ。」と(命じたので)、

「御定ぞ、つかまつれ。」と言ひければ、

【与一】^は今度は中差^を取って(しっかりと弓につがえ)、十分に引き絞って、

今度は中差^を取つてうちくはせ、よつぴいて、

男の頸の骨をひようふつと射て、

しや頸の骨をひやうふつと射て、

舟底へ真つ逆さまに射倒した。

舟底へ逆さまに射倒す。

【平家方】は静まり返つて(音もしない)、

平家の方には音もせず、

【源氏方】は今度もえびらをたたいて(どつと歓声を揚げた)。

源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。

「ああ、よく射た。」と言う人もあり、また、

「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、

「心ないことを。」と言う者もあった。

「情けなし。」と言ふ者もあり。

表現技法「対句」

1 年五十ばかりなる男は、いくさの場であるのに、なぜ舞を舞つたりしたのでしょうか？

那須与一の見事な弓の腕前に心から感心した

から。

2 那須与一は、なぜ舞を舞っている男を射殺したのですか？

主君である義経の命令だ

から。

3 那須与一は、本当はどのような思いを抱いていたのでしょうか？ 想像してみましょう。

自分の腕前に感心して舞を舞っているだけの人間を殺したくはないが、命令だから仕方ない。

4 「あ、射たり。」と言った人々はどのような思いを抱いたのでしょうか？

的だけでなく、人をいる腕前も大したものだ。ここは戦場だから、人が死ぬのは当たり前だ。

5 「情けなし。」と言った人々はどのような思いを抱いたのでしょうか？

弓の腕前に感心して舞を舞っているだけなのに、殺すことは内だろう。風流を解せぬ輩だ。

個に応じた手だてシート
1年

「今に生きる言葉
—『故事成語』—

平成18年12月12日(火)
第1校時8:55~9:45(50分)

●●● 今日の授業の目標 ●●●

故事成語とは何かを知り、原文を正確に音読することができる。

使用する教材・教具

教師 教科書、漢字テキスト、ワークシート

生徒 教科書、漢字テキスト、

漢字テスト解答用紙、

授業の流れ

個に応じた具体的な手立て

評価の規準

① 漢字テスト
「今日の漢字 全国制覇」

② 本時の目標確認

③ 「矛盾」という言葉を使った経験例を挙げ、どんな場合にどんな意味で使うかを考える。

④ 「矛盾」の文字が直接意味している(矛と盾)のどんな由来から、(つじつまがあわないこと)という意味が生まれたのか考える。

⑤ 教科書の解説部分を読み、故事成語について知る。

⑥ 知っている、調べてみたい故事成語を挙げる。

⑦ 範読を聞く。

⑧ 原文(書き下し文)を音読する。
一人読み→1分読み1→
区切って教師の後追い読み→
交替読みによる斉読→
3人読み→1分読み2→
通し読みによる斉読

⑨ 次時の予告を聞く。

1 生徒一人一人に応じたワークシート

☆評価場面1

Aの生徒に対する手立て

「矛盾」以外の教科書記載の故事成語について、言葉の由来や意味を調べ、用例の文章を作らせる。

Bの生徒に対する手立て

「矛盾」以外の教科書記載の故事成語について、言葉の由来や意味を調べさせる。

Cの生徒に対する手立て

経験例や意味が書けない生徒は辞書・国語便覧を使って意味・用法を調べさせる。

・ことわざを挙げた生徒がいた場合は、共通点は古人の知恵であること、相違点は中国の古典に描かれた故事の有無であることを補い、自己有用感を養う。

☆評価場面2

Aの生徒に対する手立て

さらに他の故事成語を挙げて、由来や意味を調べたり、用例を考えさせたりする。

Bの生徒に対する手立て

なぜその故事成語を調べてみたいのか、理由を考えさせる。

Cの生徒に対する手立て

教科書の解説部分を「矛盾」を例に置き換えて、「故事成語」とは何かを理解させる。国語便覧でどんな言葉があるのか調べたいものを挙げさせる。

2 様々な変化をつけた音読練習

☆評価場面3

Aの生徒に対する手立て

何も見ずに、原文を暗唱させる。

Bの生徒に対する手立て

暗唱に挑戦させ、原文をすらすらと読めるよう練習させる。

Cの生徒に対する手立て

③の後追い読みの時に、リズムや歴史的仮名遣いを確認するため、区切り線やふりがなを書き込ませながら読むよう指示し、必要に応じて援助する。

故事成語が中国の歴史的な事実やエピソードを背景にした言葉であることを理解し、調べてみたい言葉を挙げている。

「矛盾」の原文を正確にすらすら読んでいる。

第1学年1組 国語科学習指導案

平成18年12月12日(火)
指導者 ○○ ○○

1 教材名

「今に生きる言葉」 (故事成語)

2 生徒の思いや願いと本教材の意図

中学校の古典学習にあたり大切なことは、生徒達の古典への言語的、心情的抵抗をできるだけ取り除き、古典学習への意欲を喚起することである。日本人が脈々と受け継いできた感性や知恵の宝庫、「古典」をより多くの生徒が好きになるような指導が必要である。

そのため第一に、長い年月に磨かれた古典の文章の美しさを音読によって味わい暗記する。暗記した名文は生徒達の財産になる。

1. 古典の学習への気持ち			
アとても楽しみ		22 %	
イどちらかといえば楽しみ		39 %	
ウどちらかといえば不安		30 %	
エとても不安		8 %	
2. 楽しみな理由・不安な理由		楽しみ	不安
ア原文(古文)を声に出して読むこと		15 %	14 %
イ原文(古文)の一部を暗記すること		27 %	27 %
ウ原文(古文)の意味をつかむこと		24 %	18 %
エ古典に描かれた昔の人の思いや考えを理解すること		24 %	11 %
オ古典にまつわる知識を理解すること		29 %	17 %
カその他()		3 %	3 %

上の表は古典学習の入門期にあたり、1年生6クラスに取ったアンケート結果の一部である。小学校の教科書で芭蕉などの俳句に出会ってはいるが、初の本格的な古典学習に対し、楽しみなイメージを抱いている生徒がおよそ6割、不安な生徒が4割であった。その中でどちらの生徒もおよそ3割近くが暗唱に関心を寄せていた。そこで古典学習の導入は簡単な文章を繰り返し音読させ、楽しく、自信をつけさせることから始めることとし、音読の素材は生徒の実態に合わせたものを選んだ。まず「月の異名」を由来と合わせて紹介、中でも人気の高かった「寿限無」や「付け足し言葉」(例：驚き桃の木山椒の木)から、スタンダードな名文「枕草子」・「徒然草」の冒頭までを一挙に解説し、音読練習を行った。そしていつも授業の初めに声をそろえてリズムカルにそれらを読んだ。無理はせず、できたことをほめながら楽しく明るい雰囲気の中で古典の授業に入った。

「個に応じた指導の充実」を考えると、生徒達全員がそれぞれに達成感を味わえるよう、課題の質や量に幅を持たせて用意することもその一助になると思われる。そこで質・量とも幾つかの段階に分かれた目標を提示し、目に見える形で達成感を味わいつつ学習を展開するために、暗唱カードを活用し、音読・暗唱に取り組んでいる。

第二に、古典の文章に出会い、昔の人のものの見方や考え方にふれる。特に入門期には、置かれた状況こそ異なっても、時代を超えた人間の心や姿に現代人との共通点が見いだせることに気づかせたい。そのうえで現代とのつながりを考えさせたいものである。

前教材の「竹取物語」では、歴史的仮名遣いや係り結びなど言語知識の学習に加え、五人の貴公子の求婚譚や、かぐや姫との別れにおける翁や帝の心情にふれた。人を恋しく想い、別れに涙する気持ちは生徒達にもよく理解できたようである。本教材では、中国の歴史的事実やエピソードに由来する故事成語を、意味や由来と合わせて学びながら、日本人に影響を与えてきた昔の中国の古典に表れたものの考え方や知恵にふれていきたい。そして音読練習のしかたに様々な変化をつけることによって、漢文独特の歯切れのよい文体のリズムを楽しく味わわせていきたい。

3 教材の目標

- (1) 「故事成語」を理解し、どんな言葉があるのか調べたいものを挙げようとしている。
(関心・意欲・態度)
- (2) 「矛盾」の原文を現代語訳を参考に読み、故事の内容を理解できる。(読むこと)
- (3) 漢文の書き下し文の調子に慣れ親しむために、「矛盾」の原文を正確に音読することができる。
(読むこと)
- (4) よく使われる故事成語について言葉の由来や意味を調べ、実際の文章の中で使うことができる。
(言語事項)

4 教材の評価規準と学習活動における具体の評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
教材評価規準	・「故事成語」とは何かを理解し、どんな言葉があるのか調べたいものを挙げようとしている。	・「矛盾」の原文（書き下し文）を現代語訳を参考に読み、故事の内容を理解している。 ・「矛盾」の原文を正確に音読している。	・よく使われる故事成語について言葉の由来や意味を調べ、実際の文章の中で使っている。
学習具活体動のにおお評価規準	①故事成語が中国の歴史的な事実やエピソードを背景にした言葉であることを理解し、調べてみたい言葉を挙げている。	①現代語訳を参考にしながら語句の意味と文章の内容を理解している。 ②原文（書き下し文）によって、言葉の意味を理解しながら故事の内容を押さえている。 ③「矛盾」の原文（書き下し文）をすらすらと音読している。	①「矛盾」などの故事成語について、言葉の由来や意味を調べ、文章で使っている。

5 指導と評価の計画（全4時間） 本時 1 / 4時間

時	主な学習活動・学習内容	評価規準・評価方法
1	○教材文を通して、故事成語とは何かを知り、故事と語の意味との関連を確認する。原文（書き下し文）を正確に音読する。 ・「矛盾」という言葉は、どんな場合にどんな意味で使うかを考える。 ・「矛盾」の漢字の意味から、なぜ「矛盾」というのかを考える。 ・教科書を読み、故事成語について知る。調べてみたい言葉を挙げる。 ・範読を聞く。 ・原文（書き下し文）を音読する。	アの①（ワークシート） エの③（授業中の観察）
2	○「矛盾」の原文（書き下し文）と現代語訳を読みながら、故事の内容を理解する。 ・漢字だけの文である白文との関係にも触れながら教科書の「矛盾」の原文（書き下し文）と現代語訳を読む。 ・書き下し文と現代語訳から、この話の内容を理解する。 ・書き下し文と現代語訳を区切って交替読みをする。 ・4つの挿絵が示すそれぞれの書き下し文と現代語訳の部分をワークシートに記入し、黒板で発表する。 ・「矛盾」の故事と意味をまとめる。	エの①（授業中の観察） エの②（ワークシート）

3-4	<p>○「推敲」「五十歩百歩」「背水の陣」「蛇足」などの言葉の由来や意味を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「推敲」「五十歩百歩」「背水の陣」「蛇足」の言葉の由来や意味を調べ、用例を考え、各自ワークシートに記入する。 ・そのほかの故事成語について学習する。 ・また、好きな故事成語を筆ペンで書いてみる。 <p>*生徒の実態に応じた次のような活動の中から、その他の故事成語への関心を持つ。</p> <p>①クイズ大会 (ひととおり由来・意味を説明した後、用例を挙げ、ふさわしい故事成語を選んで当てる。ワークシートに記入。)</p> <p>②筆ペン体験 (好きな故事成語を筆ペンで書いてみる。楷書・行書・由来や意味にあったアレンジなどで・選んだ理由も書く。)</p> <p>③4コマ漫画劇場 (好きな故事成語を選び、用例を考えて、4コマ漫画に仕立てる。)</p> <p>④日本のことわざや、英語のことわざで意味の近いものを集め、かるたを作る。</p>	<p>オの① (ワークシート・授業中の観察)</p>
-----	---	--------------------------------

6 本時の学習指導 (本時 1 / 4 時間)

(1) 目標

教材文を通して、故事成語とは何かを知り、故事と語の意味との関連を理解し、原文(書き下し文)を正確に音読することができる。

(2) 評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
①故事成語が中国の歴史的な事実やエピソードを背景にした言葉であることを理解し、調べてみたい言葉を挙げている。	③「矛盾」の原文(書き下し文)をすらすらと音読している。	①「矛盾」などの故事成語について、言葉の由来や意味を調べ、文章で使っている。

(3) 展開

前時の学習内容	「竹取物語」の後半部分を読み、帝や翁達の心情を考える。
---------	-----------------------------

学 習 活 動 ・ 学 習 内 容	指導・援助と評価の創意工夫 ☆…個に応じた指導の工夫部分	分
①漢字テスト「今日の漢字 全国制覇」	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ配ってあるテキストから教師が読む問題を、正確に聴き取り、短文として書かせる。 ☆聴き取れない生徒にはもう一度だけ繰り返して読む。 	8
②本時の目標確認 ! 故事成語とは何かを知り、原文を正確に音読する。 !	<ul style="list-style-type: none"> ・板書し、ワークシートの目標をマーカーで囲ませる。 	2

③「矛盾」という言葉を使った経験例を挙げ、どんな場合にどんな意味で使うかを考える。
「矛盾」…前と後に言ったことのつじつまがあわないこと。

④「矛盾」の文字が直接意味している（矛と盾）のどんな由来から、（つじつまがあわないこと）という意味が生まれたのか考える。
⑤教科書の解説部分を読み、故事成語について知る。
故事成語とは、中国の古典に由来し、歴史的な事実やたとえ話などのエピソード（故事）を背景に持っている言葉である。
⑥知っている故事成語や、調べてみたい故事成語を挙げる。

⑦範読を聞く。

⑧原文（書き下し文）を音読する。
①立って自分のスピードで読み終えたら着席。
（歴史的仮名づかいは現代仮名づかいに直す。
自分の難読部分を意識する。）

・ワークシートに書いてから発言させる。

☆評価場面

Aの生徒に対する手だて

「矛盾」以外の教科書記載の故事成語について、言葉の由来や意味を調べ、用例の文章を作らせる。

Bの生徒に対する手だて

「矛盾」以外の教科書記載の故事成語について、言葉の由来や意味を調べさせる。

Cの生徒に対する手だて

経験例や意味が書けない生徒は辞書・国語便覧を使って意味・用法を調べさせる。

・「蛇足」「推敲」など生徒が耳にしたことがあり、由来を楽しく想像できる故事成語でも可。

☆評価場面

Aの生徒に対する手だて

さらに他の故事成語を挙げて、由来や意味を調べたり、用例を考えさせたりする。

Bの生徒に対する手だて

なぜその故事成語を調べてみたいのか、理由を考えさせる。

Cの生徒に対する手だて

教科書の解説部分を「矛盾」を例に置き換えて、「故事成語」とは何かを理解させる。国語便覧でどんな言葉があるのか調べたいものを挙げさせる。

☆ことわざを挙げる生徒がいた場合、共通点は古人の知恵、相違点は中国の古典に描かれた故事の有無であることを補い、自己有用感を養う。

・原文（書き下し文）を通して読んだ後、現代語訳を読む。

☆難読部分にはふりがなを振らせるため、明確にゆったり読む。

・様々な変化をつけた音読練習

☆全員に自分のスピードで最後まで読み切らせる。

☆評価場面

Aの生徒に対する手だて

何も見ずに、原文を暗唱させる。

Bの生徒に対する手だて

暗唱に挑戦させ、原文をすらすらと読めるよう練習させる。

<p>② 1分読み1 (1分間に何回読めるか。1分読み2のために)</p> <p>③ 区切って後追い読み (1, 2文節ごとから句読点まで、徐々に区切りを延ばしながら、教師の後について一斉に読む。漢文特有の言い回しに慣れ親しむよう初めはゆっくりから徐々にテンポ良く。)</p> <p>④ 交替読みによる斉読 (教師と生徒、男女、教室の左右など2グループで句読点ごとに交替で読む。)</p> <p>⑤ 3人読み (生徒同士でここでは句読点ごとに交替して読む。読み終えたら着席。)</p> <p>⑥ 1分読み2 (最速で1分間に何回読めるようになったか。)</p> <p>⑦ 交換読み (隣同士でそれぞれ通して読み、相互評価・自己評価をする。)</p> <p>⑧ 通し読みによる斉読 (今日の仕上げにすらすらと正確に読む。)</p>	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">Cの生徒に対する手だて</p> <p>③の後追い読みの時に、リズムや歴史的仮名遣いを確認するため、区切り線やふりがなを書き込ませながら読むよう指示し、必要に応じて援助する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 正確に読ませる。 ・ 文章の流れ、リズムを意識させるため、教師と生徒で交互に最後まで通して読み、また初めに戻ることを繰り返す。 ・ 個人→全体→グループと取り組ませ、また最後は個人→全体に返す。 ・ 生徒同士でテンポよく読めるように大きな声で読ませる。 ・ 友達と協力し合って読む。 ・ 1分読み1との比較で自分の成長を実感させる。 ・ 友達の読みを聞き合い、よい点を評価し、課題を自己認識させる。 ・ 大きな声で全員ですらすらと読み、達成感や一体感を喚起するとともに、次時への学習につなげる。 	1
<p>⑨次時の予告を聞く。</p>		1

<p>次時の学習内容</p>	<p>○「矛盾」の原文(書き下し文)と現代語訳を読みながら、故事の内容を理解する。</p>
----------------	---

備考 男子22名 女子15名 計37名

7 成果と課題

下の表は1年生6クラスで古典学習の導入時に始めた、暗唱テストへの取り組みの途中経過である。テストは十個の暗唱課題から生徒が一人ずつ暗唱するのを教師が休み時間などに聞いて行い、できた課題には個人用カードにシールを貼って評価した。

評価	暗唱した課題数	%
A	10	17
	8~9	8
B	4~7	37
C	1~3	3
未	未受験	35

(Aは8割以上、Bは4割以上、Cは4割未満の達成率の生徒とした。)

- *考察
- ・ Aの生徒の中では10個の課題すべてに合格した生徒の割合が68%と高い。
 - ・ 暗唱テスト受験者の中ではB以上の生徒は97%であり、Cの生徒の割合が低いことから、未受験者の中には高い割合の暗唱に自信がまだない生徒も多いと考えられる。

(1) 成果

- ・ 「簡単に、楽しく、テンポよく読めるもの」をポイントに、生徒の実態に合わせた音読の素材に

より、毎授業の初めに音読を繰り返すことで、大半の生徒が顔を上げ自信を持って大きな声で音読したり暗唱したりしていた。その読みから、生徒の声に出して読むこと自体の楽しさ、すらすら読める嬉しさ、少しずつ覚えられる喜びを感じることができた。意図的に音読することによって、生徒達の古典学習への抵抗感を和らげ、学習意欲を高められたようだ。

- ・「個に応じた」読みの指導を行うことは、全員がすらすらと音読できることであると考えたため、音読練習を行うにあたり、様々な読みの方法を工夫してみた。今回行った練習のねらいと意図は以下のとおりである。

＊長さは短い区切りからだんだん長いものへ伸ばす。

＊間違えたり、少ない人数しか読めなかったりした難しい部分はできるまで繰り返す。

＊速さは「正確にゆっくり」から、「はっきり速く」へを目指す。

＊読む集団の大きさは、個人→全員対教師→大グループ同士→小グループ内（3人）→個人→小グループ内（2人）→全員で

という順で、難易度を高めつつ、生徒が飽きないように変化をつける。

＊練習前と練習後で個人の成長が確認できるよう具体的な数値を記録させて読む。

＊練習の最後の部分で相互評価・自己評価をし、成果と課題を認識しあい、次時への学習と意欲につなげる。

このような練習を集中して行った結果、全員ではっきりと大きな声で音読できるようになった。

- ・「段階を追って小さな課題を積み重ねていくこと。」

「達成すべき目標が明確であること」

「達成感を味わいつつ学習を展開すること。」

「学習の成果が学習者にわかりやすい形で評価されること。」をねらいとして、暗唱課題プリントと暗唱カードを活用した。各暗唱テストに合格した生徒からどんどん個人カードにシールを貼って評価した結果、特に中程度、高程度の生徒の学習意欲が大いに向上した。また友達同士で練習しあう姿がそここで見られた。

暗唱カードの生徒の感想より

- ・最初はこんなに覚えるなんて無理だと思ったけどやっていくうちにだんだんおもしろくなってきました。こういうカードを使つての暗唱はとてもいいと思うので、これからもこんなカードを作って勉強したいです。
- ・とてもおもしろかった。学年で一番になれなかったのがとてもくやしかった。次も、こういう暗唱に挑戦し、一位になりたいです。
- ・最初は知らない文がたくさんあったので本当に覚えられるか心配していましたが、何十回も読んで覚えられました。男子で初めてパーフェクトをとれたのでとてもうれしかったです。自信がついたのでこれからもいろいろな文を暗唱していきたいです。
- ・昔テレビで春の七草やいろは歌を見たことがあってそれを覚えていたので今回の暗唱は少し楽にできました。一茶の俳句は最後まで残ってしまつてとても時間がかかりました。
- ・古文のいいところや上手に読むコツがつかめました。
- ・難しかったけど、十個も記憶できてとてもためになった。もっと他のも暗唱したい。
- ・最初の方は無理だと思ったけれど、実際やってみて楽しかったです。
- ・どれもとても難しかったけれど言えるととても気持ち良い。
- ・小林一茶の俳句を暗唱するのが一番大変でした。覚えると意味も分かってきました。全部できてうれしかったです。
- ・スペシャルの暗唱は難しかった。授業でやった暗唱は確実に覚えて、授業でやっていないところも2年、3年になつても使うと思うので、しっかり覚えたいです。全部覚えることができて良かったです。
- ・すっごくすっごく楽しかったし、大変でした。小林一茶の俳句を覚えるのが一番大変でした。パーフェクトになったときは本当にうれしかったです。
- ・月の異名が出てきて楽しかった。昔使われた言葉でこんなものがあつたらまたやりたいです。
- ・まだ全部そろつてはいないけれど、必死に覚えて発表するということがおもしろいです。

暗唱したいもの（生徒より）

花の和名・百人一首・枕詞・「平家物語」冒頭文・「源氏物語」・いろはがるた・「枕草子」(夏、秋、冬)・「おくのほそ道」・「宇治拾遺物語」・「御伽草子」・ことわざ・故事成語・詩「雨ニモ

負ケズ」・「生きる」

・歴史的仮名遣いの法則を使うことで理解と知識の定着をねらい、現代仮名遣いに直す問題を全員が作って出し合った。友達が作った問題を楽しんで解き合っていた。

(2) 課題

・授業中の音読練習は一定の成果を上げたが、授業以外での暗唱テストの方法をもっと工夫することが必要である。意欲向上の面や、**未受験者を含む全員**に暗唱テストの機会を何回か保障する面から考えると、

- ①合格した生徒に豆先生的な役割を果たしてもらうこと
- ②班で全員合格を目指して暗唱テストに取り組ませること
- ③なかなか暗唱が進まない生徒への補助プリントを作成すること

などが改善方法として挙げられる。

・生徒が抵抗なく主体的に古文を音読するためには、歴史的仮名遣いの法則の理解と知識の定着が必要である。授業で音読練習をしたものは、耳で聞き慣れることによって覚えている生徒も多い。歴史的仮名遣いを目で見えて読みこなせるよう、フラッシュカードや個人毎の単語カードなどを用意し、短時間で効果的な反復練習を一定期間継続したり、「歴史的仮名遣いで単語を書く」などその法則を使ってみたりする等、指導の工夫が必要である。

8 その他の国語指導より

漢字テスト 「全国制覇 今日漢字」と題し、毎時間の初めの10分間に国語科共通で取り組んでいる。全国公立高校入試問題を参考に、各都道府県毎に作成したテキストをあらかじめ配布しておき、家庭で学習してくる。普段は一つの都道府県の問題10問の書き取りテストとして取り組み、漢字の読みは8回分ずつまとめて答合わせを先に行っておく。

このポイントは①問題・解答が単語でなく、どちらも短文形式であること。

→言葉の意味をとらえながら、漢字を実用的に学習できる。

②問題を教師が読み上げ、生徒が聞き取って解答用紙に書く方式であること。

→集中して聴く力の訓練ができる。

③隣の生徒同士で採点したものを提出し、教師が点検・記録・評価すること。

→生徒が採点者として漢字書き取りの注意点を継続的に意識し、自分の書き取りに生かすことができる、の3点である。

読書指導 毎朝全校で取り組んでいる「朝の読書」に、その他の時間や家で読んだ本も加えた「読書50冊達成運動」を行っている。

①生徒に読書カード「読書の記録」を配布し、「読んだ月日、書名、作者」を書かせ、読んだ冊数に応じて国語担当教師がシールを貼る。

②シールは「1冊・5冊・10冊・20冊・30冊・40冊・50冊」の7種類である。目標を小刻みに設定することで、生徒に段階的に達成感を味わわせながら、読書の習慣をつけることがそのねらいである。

③読書50冊を達成した生徒名は、全校生徒の利用する渡り廊下に「達成日、クラス、達成冊数」とともに掲示し、年に数回新たな達成者を校報に掲載し、年度末に賞状を授与している。この運動を始めてから4年目、歴代の達成者名もあわせて掲示しており、その数は年々増加している。

また国語科で選定した50冊を「〇〇中推薦図書」として学校図書館に各3冊以上揃え、書名一覧をカード化して配布し、読むよう勧めたり、教師お薦めの本20冊前後を各授業時に教室で希望者に貸し出したりするなど、よりよい読書指導を目指して取り組んでいる。

本時の目標 故事成語とは何かを知り、原文を正確に音読する。

①読み () ()

矛盾

今日読んだ回数を

正の字で記録しよう。

*一分読み一回目	回と	行
二回目	回と	行

回

②どんな場合に聞いたことがありますか？

③どんな意味で使われますか？

読み読み

④矛盾

の漢字の意味は矛 () と盾 ()

⑤それなのになぜ③のような意味で使われるようになったのだろうか？
あなたの推測

⑥「矛盾」という言葉が生まれる元となった出来事||故事を
明しよう。 を使って説

⑦「矛盾」という言葉の意味を
を使って説明しよう。

故事成語とは

調べてみたい故事成語

「今に生きる言葉」学習プリント四

年組 番 氏名

点

○ いろいろな故事成語に親しもう。
 次の意味を持つ故事成語をあとの語群から選び、正しく書きましょう。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|-------------------------|--------------------------|------------|---------------------|---------------------------|------------------|---------------|-----------------|---------------|---------------|------------------------|----------------------|---------------------------|-----------------------|-----------------|----------------|----------------------|--------------|--------------|
| 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 中心人物となって主導権を握ること。 | 仲の悪い者どうしが同じところに居合わせること。 | 両者が争っている間に第三者が利益を独占すること。 | 人の実力を疑うこと。 | 詩文の字句を練り、書き直していくこと。 | よけいな手出しをして、かえって悪い結果になること。 | 肝心な最後の仕上げをしないこと。 | 強いものに頼っていばる者。 | 物事に迷って思案にくれること。 | 人生の栄華のはかないこと。 | 立身出世の糸口となる関門。 | 人生の幸・不幸は予測できないものであること。 | 目的をとげるために厳しい苦勞をすること。 | 結果的には同じであるのに、目先の差にこだわること。 | 古い習慣にとらわれて、全く進歩のないこと。 | 本質的には大きな差のないこと。 | 決死の覚悟で敵にあたること。 | 苦學しながら学問にはげみ、成功すること。 | 取り越し苦勞をすること。 | むだな行い、余計なもの。 |

ア 漁夫の利
 イ 五十歩百歩
 ウ 一炊の夢
 エ 臥薪嘗胆
 オ 鼎の軽重を問う

カ 画竜点睛を欠く
 キ 杞憂
 ク 守株
 ケ 牛耳を執る
 コ 螢雪の功

サ 呉越同舟
 シ 五里霧中
 ス 塞翁が馬
 セ 助長
 ソ 蛇足

タ 朝三暮四
 チ 推敲
 ツ 背水の陣
 テ 虎の威を借る狐
 ト 登竜門

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	記号	
																					故事成語

目指せ！暗唱名人！

1	氏名	
----------	----	--

5	4	3	2	1	
					シール 合格
「竹取物語」 冒頭文	いろは歌	月の異名	秋の七草	春の七草	メニュー
スペシャル 5	スペシャル 4	スペシャル 3	スペシャル 2	スペシャル 1	
					シール 合格
「徒然草」 冒頭文	「枕草子」 第一段 春	小林一茶の 俳句	付け足し言葉	「寿限無」	メニュー

暗唱に挑戦してどうでしたか？	暗唱したい物を紹介して下さい。

スベシヤル 『寿限無』★オバ名前です。こゝと覚えよう。

「あらまあ、金ちゃん、すまなかつたねえ。じゃあなにかい、うちの寿限無寿限無、五劫のすりきれ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、やぶらこうじのぶらこうじ、パイポパイポ、パイポのシューリンガン、シューリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナの長久命の長助が、おまえのあたまにこぶをこしらえたって、まあ、とんでもない子じゃあないか。ちよいと、おまえさんの聞いたかい？」

スベシヤル 2 『付け足し言葉』

驚き桃の木 山椒の木

あたりき車力よ車曳き

蟻が鯛なら芋虫や鯨

嘘を築地の御門跡

恐れ入谷の鬼子母神

おつと合点承知之助

その手は桑名の焼 蛤

何か用か九日十日

何がなんきん唐茄子かぼちゃ

スベシヤル

瘦蛙まけるな一茶是に有

雀の子そこのけく御馬が通る

我と来て遊べや親のない雀

やれ打な蠅が手をすり足をす

目出度さもちう位也おらが春

うつくしやせうじの穴の天の川

雪とけて村一ぱいの子ども哉

むまさうな雪がふうはりふうり哉

スベシヤル 4 『枕草子』

清少納言

春はあけほの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこし

あかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

スベシヤル 5 『徒然草』

吉田兼好

つれづれなるまゝに、日くらし、硯にむかひて、心に移り

ゆくよしなし事を、そこはかどなく書きつくれば、あやし

うこそものぐるほしけれ。

小林一茶

目指せ! 暗唱名人!

一 春の七草

せり なすな (こせう) ほこへら

ほとけのぞ すずな すずしろ (ふゆ) 七草

二 秋の七草

はま ききょう (あき) おみなえ

ふじ ばら おぼろ なでしこ (あき) 七草

三 月の異名

睦月	むつき	一月	皐月	たつき	五月	長月	ながつき	九月
如月	きさらぎ	二月	水無月	みなづき	六月	神無月	かんなづき	十月
弥生	やよい	三月	文月	ふみづき	七月	霜月	しもつき	十一月
卯月	うつき	四月	葉月	はつき	八月	師走	しわす	十二月

四 いろは歌

いろはにほへと ちりぬるを

(色は匂へど 散りぬるを)

うみのおくやま けふこえて 今日越えて

(有為の奥山 今日越えて)

わかよたれそ つねならむ

(我が世誰が 常ならむ)

あさきゆめし 互ひもせず 浅き夢見じ 酔ひもせず

(浅き夢見じ 酔ひもせず)

五 「竹取物語」冒頭文

今昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事に

使ひけり。名をば、まめきの造となむ言ひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。

あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとう

つくしうてゐたり。

目指せ！暗唱名人！

1	氏名	
----------	----	--

5	4	3	2	1	
					合格 シール
「竹取物語」 冒頭文	いろは歌	月の異名	秋の七草	春の七草	メニュー
スペシャル 5	スペシャル 4	スペシャル 3	スペシャル 2	スペシャル 1	
					合格 シール
「徒然草」 冒頭文	「枕草子」 第一段 春	小林一茶の 俳句	付け足し言葉	「寿限無」	メニュー

暗唱に挑戦してどうでしたか？

暗唱したい物を紹介して下さい。

<p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p>	<p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p>
--	--

中学校推薦図書

読書は心のスポーツであり、心の栄養です。特に若い時に本を読むことは、心を豊かにし、想像力や思考力をぐんと増してくれます。またよかった本を先生や友達とすすめあったり、それについて話したりするのうれしいものです。下記の50冊が青木中学校の推薦図書です。ぜひ読破していきましょう
*読み始めた日付を記入欄に書き、その本を読み終えたら、その日付を○で囲みます。10冊たまったら国語担当の先生にサインをもらいましょう。50冊読破者には賞状を贈ります。

*1～39が小説・物語 40、41が詩集 42～50がノンフィクションです。

年 組 番		サイン欄	10	20	30	40	50
氏 名							
読み始めた日	No.	書 名	読み始めた日	No.	書 名		
	1	赤毛のアン(モンゴメリー)		26	不思議の国のアリス(キャロル)		
	2	あのごころはフリードリヒがいた(リヒター)		27	ぼくらの七日間戦争(宗田理)		
	3	アルジャーノンに花束を(ダニエル・キース)		28	星の王子様(テグジュペリ)		
	4	いちご同盟(三田誠広)		29	坊っちゃん(夏目漱石)		
	5	大きな森の小さな家(ワイルダー)		30	窓ぎわのトットちゃん(黒柳徹子)		
	6	弟の戦争(ロバート・ウェストール)		31	水底の棺(中川なをみ)		
	7	鬼の橋(伊藤遊)		32	モモ(ミヒヤエル・エンデ)		
	8	怪談(小泉八雲)		33	もものかんづめ(さくらももこ)		
	9	海底二万里(ジュール・ヴェルヌ)		34	モルグ街の殺人事件(エドガー・アラン・ポー)		
	10	かもめのジョナサン(リチャード・バック)		35	夕鶴(木下順二)		
	11	ガラスのうさぎ(高木敏子)		36	指輪物語(トールキン)		
	12	カラフル(森絵都)		37	ライ麦畑でつかまえて(サリンジャー)		
	13	北の国から(倉本聡)		38	リトル・トリー(フォレスト・カーター)		
	14	キッチン(吉本ばなな)		39	ローワンと魔法の地図(ロッダ)		
	15	きまぐれロボット(星新一)		40	サラダ記念日(俵万智)		
	16	キューポラのある街(早船ちよ)		41	わたしと小鳥とすずと(金子みすず)		
	17	ゲド戦記 影との戦い(ル・グウィン)		42	あの日ベトナムに枯れ葉剤がふった(大石芳野)		
	18	シャーロックホームズ全集1緋色の研究(コナン・ドイル)		43	かぎりなくやさしい花々(星野富弘)		
	19	スタンド・バイ・ミー(キング)		44	君たちはどう生きるか(吉野源三郎)		
	20	空色勾玉<3冊シリーズ>(荻原規子)		45	五体不満足(乙武洋匡)		
	21	トム・ソーヤーの冒険(マーク・トウェイン)		46	国境なき医師団・貫戸朋子(NHK制作)		
	22	夏の庭(湯本香樹実)		47	だからあなたも生きぬいて(大平光代)		
	23	ハッピーバースデー(青木和雄)		48	父の詫び状(向田邦子)		
	24	バッテリー(あさのあつこ)		49	フェアブルの昆虫記(アンリ・フェアブル)		
	25	鼻・杜子春(芥川龍之介)		50	マザー・テレサ(沖 守弘)		

読書の記録		氏名			
1年 組 番		1冊	5冊	10冊	50冊 1. 読んだ本は全部書き ましょう。 2. 読んでよかったと思 えば感想欄に○をつけ ましょう。
2年 組 番					
3年 組 番		20冊	30冊	40冊	
No	読 日 ～ 日	書 名	著 者 名	感想	
1	/ ~ /				
2	/ ~ /				
3	/ ~ /				
4	/ ~ /				
5	/ ~ /				
6	/ ~ /				
7	/ ~ /				
8	/ ~ /				
9	/ ~ /				
10	/ ~ /				
11	/ ~ /				
12	/ ~ /				
13	/ ~ /				
14	/ ~ /				
15	/ ~ /				
16	/ ~ /				
17	/ ~ /				
18	/ ~ /				
19	/ ~ /				
20	/ ~ /				

今日の漢字 全国制覇への道 1

第二回 北海道 第三回 青森県 第四回 岩手県 第五回 宮城県

(1)時代を反映する(1)神秘的な美しさ(1)新たな提案。 (1)同じ系列の会社

(2)都市の高層ビル(2)善意の支え。 (2)将来の抱負。 (2)仕事が済む。

(3)自然保護を図る(3)料理が冷める。 (3)花を栽培する。 (3)価値観の違い。

(4)手段を選ぶ。 (4)会長の責務。 (4)健康を維持する(4)滑らかな口調。

(5)席を譲る。 (5)専門の学問。 (5)資源の節約。 (5)展示会を催す。

(6)当然の結果。 (6)山々の連なり。 (6)会員を募る。 (6)山の頂きを目指す

(7)種類が多い。 (7)寒暖の差。 (7)穏やかな日差し(7)新人賞の候補者

(8)よく吟味する。 (8)失敗を責める。 (8)表現を工夫する(8)ピアノの演奏会

(9)歓声があがる。 (9)仲間を募る。 (9)混雑の緩和。 (9)偏った考え。

(10)建物が揺れる。 (10)書物を著す。 (10)柔和な笑顔。 (10)秩序正しい行動

個に応じた手だてシート
3年

「夏草」
—『おくのほそ道』から—

平成18年11月17日(金)
第2校時 9:55~10:45 (50分)

●●● 今日の授業の目標 ●●●

「おくのほそ道」の冒頭を音読・暗唱し、
「平泉」本文のおおまかな意味をつかんで、
現代語訳する。

使用する教材・教具

教師 教科書、ノートプリント、資料集
評価用シール、古語辞典(人数分)
生徒 教科書、ノートプリント、資料集、
漢字プリント
音読・暗唱チェックカード

授業の流れ

- 1 新出漢字の確認
 - ・部首、音訓の確認
 - ・用例の練習
- 2 「おくのほそ道」冒頭部の音読・暗唱テスト
 - ・音読、暗唱のテストを行い、相互評価をする。
 - 古文のリズムに合わせて、言えるようにする。
 - ・全員で一斉音読、暗唱大きな声で、つかえずに音読・暗唱する
- 3 「平泉」の後半部分の現代語訳
 - ・教科書の範読
 - ・2度の一斉音読
 - ・教科書の内容を資料集で確認
 - ・教科書内容の現代語訳

個に応じた具体的な手立て

- 1 ☆評価の場面
Aの生徒に対する手立て
何も見ずに暗唱に挑戦させる。
Bの生徒に対する手立て
暗唱に挑戦させ、できなければ音読テストに取り組みさせる。
Cの生徒に対する手立て
つかえずに音読できるよう取り組みさせる。
- 2 ☆評価の場面
Aの生徒に対する手立て
暗唱で参加できるようにさせる。
Bの生徒に対する手立て
暗唱に挑戦させ、途中でわからなくなったら、教科書を見てもよいように指示する。
Cの生徒に対する手立て
声のはっきりとした音読に取り組みさせる。
- 3 ☆評価の場面
Aの生徒に対する手立て
古語辞典や教科書の脚注で語句の確認と現代語訳に取り組みさせ、終わったら小先生として他の生徒の助言に当たらせる。
Bの生徒に対する手立て
古語辞典や教科書の脚注で、語句の確認と現代語訳に取り組みさせる。一定時間後、他の生徒と確認してもよいこととする。
Cの生徒に対する手立て
教科書の脚注で語句の確認と現代語訳に取り組みさせ、一定時間後他の生徒に相談してもよいように指示する。
☆終わった生徒は、「平泉」の暗唱に挑戦するか、俳諧の暗唱に挑戦する。
(資料集を参照する。)

評価の規準

- ・言葉の意味に気をつけながら「おくのほそ道」の冒頭を音読・暗唱している。
- ・歴史的仮名遣いを正確にし、要旨を理解して、自己の考えを深めようとしている。
- ・本文と現代語訳を比較して、文の意味をとることができる。
- ・語句の意味を本文や俳諧の文脈に沿って整理し、理解している。

第3学年1組 国語科学習指導案

平成18年11月17日(金)

指導者 ○○ ○○

1 単元名・教材名

4. 古典を楽しむ 夏草―「おくのほそ道」から―

2 生徒の思いや願いと本教材の意図

本校の生徒は暗唱に熱心に取り組み、1回目のテストでも数名の生徒が暗唱することができる。これは1年時より暗唱に取り組んだことにより、「古典では暗唱をするものだ」という意識を持っているからであると思われる。この取組は特に目新しいというものではない。

しかし、「暗唱することができる」という目標に絞って評価をすることにより、出来ない生徒はいつまでも達成感を味わえないし、機会を多く設定していかないと、なかなか自分で取り組むことができない実態がある。そこで、一昨年度から段階的に暗唱できるような活動をして、自分はどこまでできたのか確認し、小さな進歩を評価するということに取り組んだ。すなわち、1年時では「竹取物語」を部分別に4段階に分けて、どこまで暗唱できたかを評価し、2年時では「枕草子」を春・夏・秋・冬に切って、春からどこまでを暗唱できたのかということに取り組んだ。

また、「平家物語」冒頭と「徒然草」序段を合わせて暗唱させることによって、すでに「枕草子」の第一段を暗唱しているなど進度の早い生徒にも対応できると考えた。こうした取組をしていった一方で、生徒には物事に対してよく考えたり、自分自身の課題をしっかりと捉えて自己実現を図るという力にはまだまだ向上の余地があるという印象を持った。生徒は、学習に対し前向きな姿勢を見せ、授業中も真剣に学習に取り組んでおり、一層の向上を図りたいという気持ちがあるものの、その一方で教師の側から与えられたものをこなすことが学習であると考えている傾向があり、今後は自分自身の手で課題を見つけ学習するという姿勢を身に付けさせることが肝要であると考えた。

そこで、今回の調査研究では、自ら課題を設定し、自らの手で課題を解決していく力を身に付けさせたいという視点をとった。その上で、その方法を修得することで、達成感を味わわせ、自ら学習し理解しようとする態度を養いたいと考えた。以上のようなことから、学習進度の早い生徒を「小先生」として他の生徒への助言に当たらせることで、より深い理解を促そうという取組を試みた。また、学習進度の遅い生徒は、他の生徒と相談することで課題解決への手立てをとることができ、学びの差に関係なく学習の達成感を味わわせることができると考えた。

本教材は、日本古典史上において重要な作品であり、紀行文で味わう各地の風景描写やその地への作者の思いとともに、俳諧の精神を学ぶ上でも重要な教材である。また、松尾芭蕉の格調高い文体が第一の魅力であり、それを味わいながら芭蕉の「旅」への心情に触れることで、当時の人々の心に思いを馳せ、「おくのほそ道」の旅の道程を追っていく授業を展開したい。そこから俳諧に触れたり味わったりすることを通して、深い想像力を養いつつ他人の心に寄り添う態度を養いたいと考え、この教材を設定した。

3 教材の目標

(1) 「おくのほそ道」の文章を読んで、作者の考えを理解しようとしている。

(関心・意欲・態度)

(2) 「おくのほそ道」の文章を音読・暗唱することで考えを深めることができる。(読むこと)

(3) 古文の仮名遣いや俳諧の表現に慣れ、その特徴をつかんで味わうことができる。

(知識・理解・技能)

4 教材の評価規準と学習活動における具体的評価規準

	ア国語への関心・意欲・態度	エ読む能力	オ言語についての知識・理解・技能
単元評価の規準	・「おくのほそ道」の文章を読んで、作者の考えを理解しようとしている。	・「おくのほそ道」の文章を音読・暗唱することで考えを深めることができる。	・古文の仮名遣いの表現を理解し、文章や俳諧の内容を味わおうとしている。
学習活動体におお評価規準	①歴史的仮名遣いを正確にし捉え、要旨を理解しようとしている。	①語句の意味に注意して「おくのほそ道」の冒頭を音読・暗唱している。 ②本文と現代語訳を比較して、文の意味をとることができる。 ③全体を読みとり、作者の考えを理解し、自分の考えを深めようとしている。	①語句の意味や表現を、本文や俳諧の文脈に沿って整理し、理解している。

5 指導と評価の計画（全 4 時間）本時 4 / 4 時間

◎評価規準 ・ 評価方法

時	主な学習活動・学習内容	評価規準・評価方法
1	（1）「おくのほそ道」の時代と作者についての考察 ①作者の生きた時代と、作品に込められた思いの考察 ・作者について概要のまとめ ・作者の生きた時代と、「旅」への思いについての考察 ②冒頭部の音読練習 ・範読、語句の確認 ・音読、暗唱の練習	◎アの① エの① ・ノートへの書き込みと整理 ・音読、暗唱活動の様子
2	（2）本文冒頭を音読し、「おくのほそ道」の作品についての考察 ①作品の生まれた背景と、作者の「旅」への思いについての考察 ②冒頭部の音読練習 ・音読、暗唱のテスト ・範読、一斉読み	◎アの① エの① オの① ・ノートへの書き込みと整理 ・音読、暗唱活動の様子
3	（3）冒頭部の内容理解と、「平泉」の音読 ①冒頭部の音読、暗唱テスト ②冒頭部に込められた、「旅」への思いと、俳諧についての考察 ③「平泉」の部分の音読練習 ・範読、語句の確認 ・音読、暗唱の練習	◎アの① エの③ オの① ・ノートへの書き込みと整理 ・音読、暗唱活動の様子
4	（4）「平泉」後半部の現代語訳 ①冒頭部の音読、暗唱テスト	◎アの① エの①② オの①

②「平泉」の部分の音読練習 ・ 範読、語句の確認 ・ 音読、暗唱の練習 ③「平泉」後半部の現代語訳を通しての、古語と現代の意味のつながりの考察と本文の理解	・ ノートへの書き込みと整理 ・ 音読、暗唱活動の様子 ・ 現代語訳の様子
--	---

6 本時の学習指導 (本時 4 / 4 時間)

(1) 目標

「おくのほそ道」の冒頭を音読・暗唱し、「平泉」本文のおおまかな意味をつかんで、現代語訳できる。

(2) 評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
①歴史的仮名遣いなど語句の意味に注意して読み取り、自己の考えを深めようとしている。	①言葉の意味に気をつけながら「おくのほそ道」の冒頭を音読・暗唱している。 ②本文と現代語訳を比較して、文の意味をとらえている。	①語句の意味を本文や俳諧の文脈に沿って整理し、理解している。

(3) 展開

前時の学習内容	本文の冒頭を音読し、時代や作者について理解する。
---------	--------------------------

学 習 活 動 ・ 学 習 内 容	指導・援助と評価の創意工夫 ☆…個に応じた指導の工夫部分	分
1. 新出漢字の確認 部首、音訓の確認 畜・・・家畜、牧畜 塀・・・土塀、板塀 甲・・・甲板、甲乙 } 用例の練習	◎オの① ○板書によって整理する。 ・ 漢字プリントへの書き込み ・ 用例の語句の意味を考えさせる。 (例)問「牛や豚など、生産して消費するために飼っている動物のことを何と言いますか？」→答「はい、家畜です」	7
<今日のめあて> 本文のおおまかな意味をつかんで、現代語訳できるようにしよう。	○「今日のめあて」を黄色のチョークで板書する。	2
2. 冒頭部の音読、暗唱 ・ 音読、暗唱テスト 音読、暗唱のテストを行い、相互評価をする 古文のリズムに合わせて、言えるようにする	◎エの① (前時まで) ☆暗唱の達成度に応じて、次のように指導する。 ☆評価場面 Aの生徒に対する手立て 何も見ずに暗唱テストに挑戦させる。	5

<p>・ 全員での一斉音読、暗唱 大きな声で、つかえずに音読・暗唱する</p>	<p>Bの生徒に対する手立て 暗唱に挑戦させ、できなければ音読テストに取り組ませる。</p> <p>Cの生徒に対する手立て つかえずに音読できるよう取り組ませる。できなければ練習させる。</p>	3
<p>3. 「平泉」の後半部分の現代語訳</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書の範読（P 130～131） 2度の一斉音読 教科書P 130～P 131のL 2までの内容を資料集で確認 語句の意味や、場面、心情を理解する 教科書P 131・L 3～L 8の内容の現代語訳現代語訳を通して内容を理解し、作者の思いに触れる 	<p>テストの達成に応じてカードにシールを貼る。 評価の観点をカードに明示し、相互評価させる。</p> <p>○音読、暗唱の様子とカードの点検 ☆音読・暗唱の達成度に応じて、次のように指導する。</p> <p>— ☆評価場面 —</p> <p>Aの生徒に対する手立て 暗唱で参加できるようにさせる。</p> <p>Bの生徒に対する手立て 暗唱に挑戦させ、途中でわからなくなったら、教科書を見てもよいように指示する。</p> <p>Cの生徒に対する手立て 声のはっきりとした音読に取り組ませる。</p>	3
	<p>○音読、暗唱の様子</p> <p>◎アの①、エの②、オの① （☆前時にルビが必要な生徒にはふらせてある。）</p>	5
	<p>5</p> <p>— ☆評価場面 —</p> <p>Aの生徒に対する手立て 古語辞典や教科書の脚注で語句の確認と現代語訳に取り組ませ、終わったら小先生として他の生徒の助言に当たらせる。</p> <p>Bの生徒に対する手立て 古語辞典や教科書の脚注で、語句の確認と現代語訳に取り組ませる。一定時間後、他の生徒と確認してもよいこととする。</p>	20

4. 本時のまとめと次回の予告	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> Cの生徒に対する手立て 教科書の脚注で語句の確認と現代語訳に取り組ませ、一定時間後他の生徒に相談してもよいように指示する。 </div> ☆終わった生徒は、「平泉」の暗唱に挑戦するか、俳諧の暗唱に挑戦する。 (資料集を参照する。)	3
	○ノートプリントの回収をし、点検	

次時の学習内容	漢文の読み方を確認し、論語を正確に読む。(次の教材)
---------	----------------------------

5 成果と課題

(1) 成果

今回の指導では、「教育に関する3つの達成目標」にもあるように、まずしっかりと音読ができることを前提とし、暗唱ができなくとも音読はできるようになるとういう二重構造の評価をした。もともと、2年時では暗唱をすべてできた生徒が1回目のテストでは4%なのに対し、7回のテストの後には86%になったという結果があった。今回は、この「おくのほそ道」の指導が終わった後もテストを続け、計9回のテストを行ったのだが、初回で暗唱できた生徒が5%だったのに対し、最終的に全て暗唱できた生徒は92%であった。ただ、「音読できればいい」と考え、二段階の評価の低い方で満足してしまった生徒もいたようで、予想よりは暗唱できた生徒が少ないというやや物足りない結果になった。しかし、暗唱でき、シールをもらえたことに喜びを感じる生徒は多く、意欲の向上には結びついていると考えられる。

このような取組は、一時間の授業の中の一部を使ってできる上、評価の観点を明示しておくことで、生徒相互での評価が可能となることがメリットとして挙げられる。その上で、生徒の側に評価者としての意識を持たせ、よりよい聴き手を育てる効果もあると考える。全体のテストを終えた上で、一斉音読・暗唱を行うが、「全部覚えていない人は時々見てもいい」「覚えた人はなるべく見ない」など一人一人の学びの差によって、個人個人の課題も見え、できたことによる満足感も各々が味わえると考えた。

一方で、音読、暗唱だけでなく、現代語訳などのような内容を深く考えたり、作業するような内容については、どうしても進度に差が付いてくる。このような個人で行う作業をトレーニングと考え、こうした時間は一つの授業の中で必要であると考えている。このように進度に差がある場合、「終わったら何をすればいいですか?」という質問がよくあると思う。私は、これまでは「ちょっと待ってて」ということが多かった。そのような場合の個に応じた指導のために、より理解を深めるための指導内容をあらかじめ準備しておくことで、より上位層に対応できるのではないだろうか。さらに、一定時間は自分一人で考えさせる時間を設け、その後に生徒同士で確認したり、相談しあう時間を設定することで、進度が遅れがちな生徒にも「できた」「わかった」という満足感を味わわせることができた。同時にまた、「小先生」を設定することで、より深い理解を促せたり、また、学習進度の遅い生徒は、他の生徒と相談することで課題解決へのヒントとすることができ、学びの差に関係なく学習の達成感を味わわせることができた。こうした取組を試みたことで、実際に生徒からは、「友達が教えてくれてよくわかった。」「人に教えてあげること、曖昧だったのがわかった。」などという声が聞かれた。

(2) 課題

今回の指導では、読むことに時間をかけた結果、内容の理解におおまかな現代語訳をすることによって、ある程度の内容を理解することになり、より深く内容を理解することにつながったと言える。一方で定期テストなどの結果からは、考えた内容や理解した内容を整理したり表現する知識や技能がまだ十分に備わっていないこともあり、今後は内容を理解しているということを音声言語や文字によって表現するための取組が必要であると考えた。

また、評価に関しても課題はあった。特に音読・暗唱テストの評価規準を明示してあるとはいえ、生徒間の相互評価にどこまで信憑性があるかということも今後の課題であると言える。具体的な評価規準を提示しつつ、生徒の評価する力を育てていくための取組も必要であると感じた。

必修 奥の細道 冒頭 音読・暗唱チエックカード

3年 組 番氏名

【評価規準】

《音読の部》

- ①相手にはっきりと聞き取れる大きさの声であること。
- ②一度もつかえずに最後まで読み通すこと。
- 以上ができていれば合格とする。

《暗唱の部》

- ①相手にはっきりと聞き取れる大きさの声であること。
- ②途中でつかえてもよいが、最後まで通せること。
- ③つかえた場合は15秒まで待つてよい。
- 以上ができていれば合格とする。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上には生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
表八句を庵の柱に懸け置く。



→松島



↑立石寺



→中尊寺金色堂

評価者を書く

日付けを書く

音読か暗唱かを書く

薄く口名を書く(あとでシール)

『平家物語』冒頭

祇園精舎の鐘の声、
諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、
盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、
ただ春の夜の夢のごとし。

たけき者もつひには滅びぬ、
ひとへに風の前の塵に同じ。

『徒然草』序段

つれづれなるままに、日暮らし、
硯に向かひて、心にうつりゆく
よしなし事を、そこはかとなく
書きつくれば、あやしうこそも
のぐるほしけれ。

『枕草子』第一段

春はあけぼの。やうやう白く
なりゆく山ぎは、すこしあかり
て、紫だちたる雲のほそくたな
びきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、
やみもなほ、螢の多く飛びちが
ひたる。また、ただ一つ二つな
ど、ほのかにうち光りて行くも
をかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山
の端いと近うなりたるに、鳥の
寝どころへ行くとて、三つ四つ、
二つ三つなど、飛びいそぐさへ
あはれなり。まいて雁などのつ
らねたるが、いと小さく見ゆる
はいとをかし。日入りはてて、
風の音、虫の音など、はたいふ
べきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたる

はいふべきにもあらず、霜のい
と白きも、またさらでもいと寒
きに、火など急ぎおこして、炭
もて渡るもいとつきづきし。昼
になりて、ぬるくゆるびもてい
けば、火桶の火も白き灰がちに
なりてわろし。

										付
										日
										評価者
										平家物語 (完全)
										春まで
										夏まで
										秋まで
										最後
										徒然草 (完全)

(できたらシールを貼る)



おきな

ウ

今は昔、竹取の翁といふものあ

（A）

りけり。野山にまじりて竹を取り

ズ

つつ、よろづのことに使ひけり。

イ

名をば、さぬきのみやつことなむ

（B）

いひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ

一筋ありける。あやしがりて、寄

りて見るに、筒の中光りたり。

（C）

それを見れば、三寸ばかりなる人、

いとうつくしうてゐたり。

シユウ

イ

（D）

1年

組

番

氏名

シールの付け方

黒・・・（A）までも言えなかった人

赤・・・（A）まで言えた人

黄・・・（B）まで言えた人

青・・・（C）まで言えた人

緑・・・（D）まで言えた人

回数	1	2	3	4	5	6	7
日付							
評価者氏名							
評価者の一言コメント							
シール							

個に応じた手だてシート
1年

「物語の味わい『竹取物語』」

平成18年11月24日(金)
第2校時 9:50~10:50(50分)

●●● 今日の授業の目標 ●●●

・『竹取物語』の冒頭文を歴史的仮名遣いに注意して音読する

使用する教材・教具

教員 教科書・チェックアップカード
音読プリント・ストップウォッチ
生徒 教科書・チェックアップカード【資料1】
音読プリント【資料2】・ノート【資料3】

授業の流れ

- ①本時の学習活動と目標を確認する
- ②『竹取物語』の特徴を理解する
- ③冒頭文の音読プリント【資料2】を使い、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す
- ④範読に続き音読する
範読→交代読み→通し読み
→一斉読み
→スピード読み
(3分間で5回以上
→ペア読み(正しく読めているかチェックしあう)

- ⑤同時通訳読みをし、内容を理解する

個に応じた具体的な手立て

- ・SSと分担して机間指導(わからない場合は質問するように指示)
- ・書き込みの様子を観察
→ワークシートの色つき部分に着目させる
→「古典の仮名遣い」をまとめたノートを参考にするようにアドバイスする
- ・終わっている生徒には微音読させ、正しく現代仮名遣いに直せたか、耳からも確認させる

- ・SSと分担して机間指導(わからない場合は質問するように指示)
- ・書き込みの様子を観察
→教科書を参考にして、プリントに色ペンで現代語訳を書き込ませる
- ・終わった生徒には暗唱に取り組ませる(内容を意識した音読)
- ・チェックアップカードで今日の学習のまとめをさせる

評価規準

歴史的仮名遣いの約束に照らして正しく現代仮名遣いに直している

歴史的仮名遣いや、古語と現代語の意味の違いについて理解している
古文と現代語訳や脚注を対応させて内容を理解しながら読んでいる

第1学年1組 国語科学習指導案

平成18年11月24日(金)

指導者 ○○ ○○

1 教材名

～物語の味わい～ 『竹取物語』

2 生徒の思いや願いと本教材の意図

4月の授業開きから、帯学習として様々な名文の音読・暗唱に取り組んできた。その成果であろうか、今では、ほとんどの生徒が初めて出会う文章でも、すすんで読もうとする意欲をもち、またすらすら音読できるようになってきている。さらに、一歩進めて暗唱することができるようにするために、

- ①何度も繰り返し声に出して読む。
- ②友達同士で聞きあいながら確認する。
- ③おおまかな内容を理解しながら読む。

を心がけて、毎回音読に取り組むようにしている。

本教材は古典の入門期のためのものであり、古典に親しむことが第一の目標である。落語の『寿限無』や『論語』などを暗唱したことで、生徒は古典のリズム感のある文章の魅力に惹きこまれており、古典を音読する楽しさを実感しつつある。また『こういう昔の文章をもっと読みたい、もっと知りたい』という願いもある。そのため、古典作品への大きな抵抗を感じずに、本教材を読むことができると思われる。

『竹取物語』は、誰でも一度は読んだことや聞いたことのある物語であり、内容を理解し、古文のおもしろさに触れるには格好の作品である。古文独特の言葉遣いに慣れ、現代とは異なる意味をもつ言葉について理解し、古文のおもしろさに目を向けさせることを目標とする。

指導の重点を「古文特有のリズムを意識してすらすらと音読できるようにすること」とする。それが「古文を読む」ことにつながると考える。本教材の学習で生徒に身に付けさせたい力は、具体的に次の3点である。

- ①歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに正しく直して読める。
- ②古文のリズムを意識して読める。
- ③古文と現代の語の意味の違いを理解して読める。

多様な音読の形態を用いて、古文の読み方の基礎をしっかりと定着させたい。

本年度は、スクールサポーター(SS)とティーム・ティーチングを組み、授業を進めている。ティーム・ティーチングの良さを生かすために生徒の活動時間を多くし、学習の集中力、学習内容の定着率の向上を目指して、協力して個に応じた支援を行っている。生徒も「わからない時は近くにいる先生にすぐに質問できる」とアンケートに答えている。

3 教材の目標

- (1) 古文に対する興味・関心をもち昔の物語を読もうとしている。 (関心・意欲・態度)
- (2) 古文の仮名遣いや文末の言葉の違い、現代にはない言葉や意味の違いに注意して、音読・暗唱することができる。 (読むこと)
- (3) 古文独特の歴史的仮名遣いに慣れ、はっきりと音読することができる。 (言語事項)

4 教材の評価規準と学習活動における具体的評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読むこと	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	○古文に対する興味・関心をもち昔の物語を読もうとしている。	○古文の仮名遣いや文末の言葉の違い、現代にはない言葉や意味の違いに注意して、音読・暗唱している。	○歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、文脈の中の語句の意味をとらえ、はっきりとすらすら音読している。
学習活動における具体的評価規準	①仮名遣い、言葉遣い等、現代の作品にはない特徴を指摘し、すすんで古文を読もうとしている。 ②国語便覧を使って、教材にない5人の貴公子について調べたり、他の古文を読んだりしようとしている。	①範読を基に言葉のまとまりをとらえたり、歴史的仮名遣いの約束に照らしたりして、古文を正しく音読している。 ②冒頭・かぐや姫の昇天・天の羽衣を暗唱している。 ③古文と現代語訳や脚注を対応させて、内容を理解しながら読んでいる。	①歴史的仮名遣いや、古語と現代語の意味の違いについて理解している。 ②古文のリズムを感じて音読している。

5 指導と評価の計画（全5時間）本時 1 / 5 時間

時	主な学習活動・学習内容	評価規準・評価方法
1 本時	○『竹取物語』の冒頭文を歴史的仮名遣いに注意して音読する ・『竹取物語』の特徴を理解する ・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す ・範読に続き音読し、読み方をまねる ・様々な形態で繰り返し音読する 【資料1・2・3】 ※帯学習→暗唱に挑戦!	ア① エ①③ オ① ・音読の様子(観察) ・歴史的仮名遣いの約束の理解(観察・プリント) ・内容を理解した音読の様子(観察・プリント) エ②
2 3	○冒頭文の暗唱をする ・全体で音読練習をする ・生活班で音読練習を行い、互いに評価しあう ・暗唱発表会を行い、評価しあう【資料4・5・6】 ※帯学習→暗唱に挑戦!	ア① エ② オ② ・音読の様子(観察) ・相互評価(プリント・観察) エ②
4	○かぐや姫の昇天・天の羽衣を歴史的仮名遣いに注意して音読する ・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す ・範読に続き音読し、読み方をまねる ・様々な形態で繰り返し音読する ※帯学習→暗唱に挑戦!	ア① エ①③ オ② ・音読の様子(観察) ・歴史的仮名遣いの約束の理解(観察・プリント) ・内容を理解した音読の様子(観察・プリント) エ②
5	○5人の貴公子の求婚について調べ、まとめる ・国語便覧を使って5人への難題を調べる ・5人を比較して、自分の考えをまとめる 【資料7・8】 ※帯学習→暗唱に挑戦! 【資料9】	ア② エ④ ・意見文 (観察・プリント) エ②

6 本時の学習指導 (本時 1 / 5 時間)

(1) 目標 『竹取物語』の冒頭文を歴史的仮名遣いに注意して音読することができる

(2) 評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読むこと	オ 言語についての知識・理解・技能
○ 仮名遣い, 言葉遣い等, 現代の作品にはない特徴を指摘し, すすんで古文を読もうとしている。	○ 範読を基に言葉のまとまりをとらえたり, 歴史的仮名遣いの約束に照らしたりして, 古文を正しく音読している。 ○ 古文と現代語訳や脚注を対応させて内容を理解しながら読んでいる。	○ 歴史的仮名遣いや, 古語と現代語の意味の違いについて理解している。

(3) 展開

学習活動 ・ 学習内容	指導・援助と評価の創意工夫 ☆…個に応じた指導の工夫部分	分
① 本時の学習活動と目標を確認する。	・ 『古文の音読との出会い』チェックアップカード【資料1】で確認させる ☆マーカーでチェックさせる(観察)	5
② 『竹取物語』の特徴を理解する。 ○ 作品の特徴 平安初期に成立・作者不明 現存最古の物語	☆教科書にチェックさせる(観察)	5
③ 音読プリント【資料2】を使い, 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す。 ○ 現代仮名遣いへの直し方 いふ→いう よろづ→よろず 使ひけり→使いけり なむ→なん うつくしうて→うつくしゅうて ゐたり→いたり	☆評価場面 ① Aの生徒に対する手立て 正しく現代仮名遣いに直している →すすんで微音読するよう支援する Bの生徒に対する手立て だいたい現代仮名遣いに直している →微音読して正しく直しているのか確認するように指示する Cの生徒に対する手立て →ワークシートの色つきの部分に着目するよう指示する →各自まとめた「古典の仮名遣い」【資料3】を参考にさせる	10
④ 範読に続き音読する。 ○ 音読の形態 範読→交代読み→通し読み →一斉読み →スピード読み (3分間で5回以上) →ペア読み(正確さをチェック)	・ テンポ良く範読し, 古文のリズムを意識させる ☆SSと共に机間指導を通して, 言葉のまとまりや古文のリズムを意識した音読になるように支援する	15

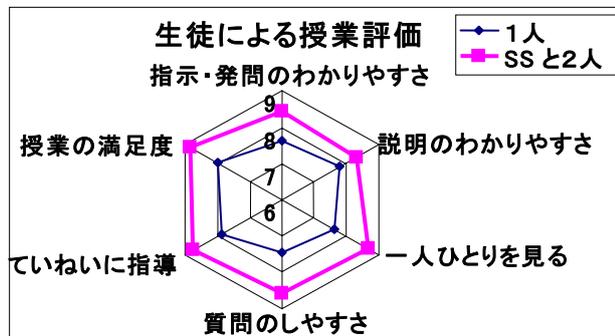
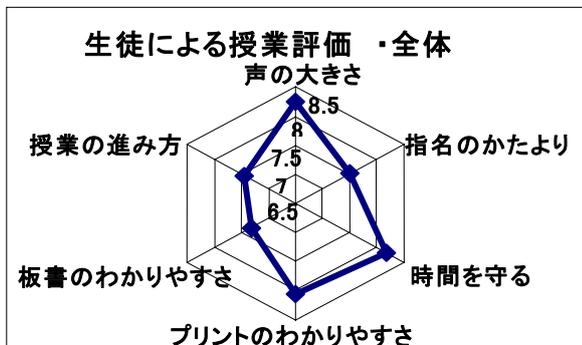
<p>⑤同時通訳読みをし、内容を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員→現代語訳 生徒→古文 ・ プリントに現代語訳を書き込む <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>○注意する言葉の意味 あやしがりて→不思議に思っ うつくしうて→かわいらしく</p> </div>	<p>☆評価場面 ②</p> <p>Aの生徒に対する手立て 内容を理解して音読している →暗唱を意識した音読に取り組みさせる</p> <p>Bの生徒に対する手立て 現代と意味の違う語句を理解している →全体の内容を意識するよう指示する</p> <p>Cの生徒に対する手立て →教科書の脚注を参考にさせ、音読 プリントに色ペンで現代語訳を書き 込ませ、確認させる</p> <p>☆チェックアップカードで今日の学習のまとめをさせる ☆終わった生徒には暗唱に取り組みさせる</p>	10
<p>※帯学習→暗唱に挑戦!</p>	<p>☆進み具合に合わせて、暗唱する作品のアドバイスを</p>	5

[参考資料]『国語学力を測る「到達度」チェックカード』 明治図書
『進んだ子のための国語科発展学習ワークシート』 明治図書

次時の学習内容	○冒頭文の暗唱をする
---------	------------

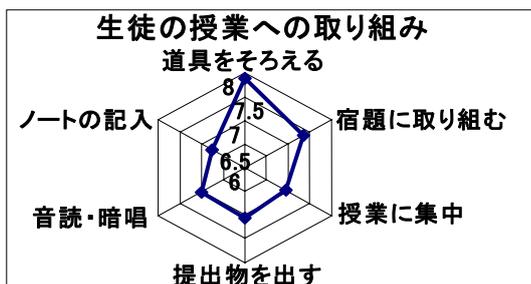
7 成果と課題

11月に「国語アンケート」をとった。それぞれの項目を10満点(5が平均)で評価している。集計結果は次の通りである。



考察

- ・ 5月のアンケートでは7.5だった「プリントのわかりやすさ」が8.1と向上した。
→全員が取り組めるようにと考え、ごくシンプルなワークシートとし、スクールサポーターと共に机間指導に力をいれ、個に応じた支援を行った結果と考える。
- ・ 5月時同様、スクールサポーターと2人の授業の方が、評価が高い。
→「近くにいる先生に気軽に質問できる」・「何度もアドバイスをもらえる」から国語の授業がわかる・楽しい・好きになったという意見が多い。



- ・ ノートの記入では、ただ板書を写すのではなく、それぞれ工夫するように指導している。
→「工夫して書くからしっかり頭に入る」
「どう書けばいいかわからない」と2つの意見
今後の課題⇒見本として良いノートを見せ、参考にさせる。個々に助言をする

成果

生徒の自己評価・振り返りワークシートによる『古文の学習で身に付いたこと』は次の通りである。

- ・暗記力（覚えると楽しい）（理解して覚えると身に付いたと実感できる）
- ・暗唱（なんだかわからなかった古文が暗唱することで少しわかってきた）
（読み方を予想できるようになった）（音読が楽しい）
（声を出して読むことで早く覚えられた）（内容がでてくるようになった）
（何を伝えたいのか・何が描かれているのか、内容を理解しながらできる）
（リズムのよい言葉）（暗唱するたびに古文が楽しくなっていく）
- ・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す力（いろいろな古文を読めるようになった）
- ・昔のことを知る（昔の文化を感じた）（今でも昔の読み方が伝えられている）
- ・古文の言葉の響き（現代語へと変化したことを考えた）（現代語と古文の言葉の意味の違い）
- ・つまらなそうなイメージをもっていた古文がやってみたら意外とおもしろかった
- ・有名な文学作品にふれることができた（古文（昔の作品）に興味をもった）

今回指導の中心とした「音読・暗唱」に対する生徒の意欲はとても高い。4月から継続している音読指導の成果として、音読後は目的意識をもって授業に取り組もうとする様子が見られる。また、より正しく暗唱するためには、おおまかな内容を理解しながら読むとよいと、経験から学んでいる。つまり「読む＝内容を理解する」ということを生徒は身に付けつつあると感じている。暗唱に力を入れた結果として、他教科での学習や学校生活でのプリント等の便りなどでも、文章を読んで内容を理解する力を生かそうとする場面が見られるようになった。例えば学級活動の中では、学級だよりを配布するとほとんどの生徒が声を出して読み、以前はあった教員への質問はほとんどなくなった。

「つまらなそうなイメージをもっていた古文がやってみたら意外とおもしろかった」という意見が多く、「古典に親しむ」という第一の目標を達成できたと考える。多様な形態の音読や『暗唱に挑戦!』に意欲的に取り組ませた結果、本教材で身に付けさせたい力の具体的な3点、

- ①歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに正しく直して読める。
- ②古文のリズムを意識して読める。
- ③古文と現代の語の意味の違いを理解して読める。

を8割程度身に付けさせることができたと考える。『竹取物語』暗唱プリント(穴埋め)→平均12(19満点)、暗唱発表会平均点12点(満点15点)、『暗唱に挑戦!』暗唱カード平均点78点(100点満点)という結果である。

課題

音読・暗唱では読めているが、歴史的仮名遣いの確認テストを行うと正しく書けない場合もある。『竹取物語』暗唱プリント(穴埋め)→平均12(19満点)という結果もあるので、今後も繰り返し指導が必要だと考える。英語科のフラッシュカードのようなものを取り入れ、注意したい歴史的仮名遣いや語句を授業の初めに確認するなど、工夫が必要である。

一斉授業ではCに対する生徒への支援を中心に、個に応じた指導の工夫をしている。さらにAの生徒に対する生徒への発展的な学習支援も視野に入れた指導の工夫も、今後の課題である。

竹取物語 音読プリント

冒頭

☆教科書を参考にして、右側に現代仮名遣い・左側に現代語訳を書こう

《現代仮名遣い》

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山に

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

まじりて竹を取りつ、よろづの事に使ひけり。

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

名ば、さぬきの造となむいひける。

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

それを見れば、三寸ばかりなる人、

《現代語訳》 その中を

《現代仮名遣い》

いと うつくしうて ゐたり。

《現代語訳》

座っている。

かくや姫の昇天

☆右側に現代仮名遣い・左側に現代語訳を書こう

《現代仮名遣い》

かかる程に、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家の

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

あたり昼の明さにも過ぎて光りわたり、望月の

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

穴さへ見ゆるほどなり。

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

大空より、人雲に乗りて下り来て、土より

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

五尺ばかり上がりたる程に立ち列ねたり。これを

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

見て、内外なる人の心ども、物におそはるる

《現代語訳》

家の内や外にいる

物の怪

《現代仮名遣い》

やうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。

《現代語訳》

対戦しようという気持ち

天の羽衣

☆教科書を参考にして、右側に現代仮名遣い・左側に現代語訳を書こう

《現代仮名遣い》

天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の

《現代語訳》

もう一つは、

《現代仮名遣い》

天人言ふ、「壺なる御薬たてまつれ。きたなき所の

《現代語訳》

お飲みください。汚れた地上のものを

《現代仮名遣い》

物きこしめしたれば、御心地あしからむものぞ。」

《現代語訳》

お召し上がりになったので、ご気分が悪いでしょう。

《現代仮名遣い》

とて、持て寄りたれば、いささか嘗めたまひて、

《現代語訳》

ちよつとなめて、

《現代仮名遣い》

すこし形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

ある天人、包ませず。御衣をとり出て、着せむとす。

《現代語訳》

天の羽衣を出して、

《現代仮名遣い》

その時に、かぐや姫、「しばし待て。」と言ふ。

《現代語訳》

《現代仮名遣い》

「衣着せつる人は、心異になるなりと言ふ。」

《現代語訳》天人が

心が人間世界とは変わってしまうと聞く。

《現代仮名遣い》

ものひと言、言ひ置くべきことありけり。」

《現代語訳》

一言、みんなに残したい言葉があります。」

《現代仮名遣い》

と言ひて、文書く。

《現代語訳》

手紙を書く。

竹取物語 暗唱プリント

冒頭

☆ の中に入る言葉を聞き取ろう

今は昔、といふものありけり。野山に竹を取りつ、
に使ひけり。名は、となむ。。その竹の中に、
なむ一筋ありける。寄りて見るに、筒の中光りたり。そ
れを見れば、三寸ばかりなる人、いとるたり。

かぐや姫の昇天

☆ の中に入る言葉を聞き取ろう

、宵よひうち過ぎて、ばかりに、家のあたり昼の明さ
にも過ぎて光りわたり、の明さを十あはせたるばかりにて、
ある人の毛の穴あなへ見ゆるほどなり。大空より、人雲に乗りて下
り来て、土より上がりたる程に立ち列ねたり。これを
見て、内外うちとなる人の心ども、物におそはるるやうにて、
心もなかりけり。

天の羽衣

☆の中に入る言葉を聞き取ろう

天人の中に、持たせたる箱あり。入れり。またあるは、
入れり。一人の天人言ふ、「壺なる御薬みくすりたてまつれ。きたなき所の
物、御心地ものぞ。」とて、持て寄りたれば、い
ささか、すこし形見とて、脱ぎ置く衣きぬに包まむとすれ
ば、ある天人、包ませず。御衣みきぬをとり出いでて、着きせむとす。その時に、
かぐや姫、「しばし待て。」と言ふ。「衣着せつる人は、
と言ふ。ものひと言、言ひ置くべきことありけり。」と言ひて、文書ふみ
く。

暗唱発表会 評価表

☆『竹取物語』の冒頭の暗唱に挑戦!!

名前	正確さ	声の大きさ	内容に合わせた 読みの強弱	総合点	合・否	
						◎配点 いとをかし 5点 よろし 4点 よし 3点 がんばってたも 2点
						◇この人を見習いたい!
						◇感想

五人の貴公子の求婚

名前	手段	結果
石作の皇子 ← 仏の御石の鉢 (インドにある釈迦が使った鉢)	初めからあきらめた ← 奈良の山寺にあった真つ黒な鉢を持ちてきて錦の袋に入れて見せた	本物の仏の鉢にある光の輝きが全くなかった ← 偽物だとすぐにばれた
庫持の皇子 ← 蓬莱の玉の枝 (不老不死の仙人が住む蓬莱の本の枝)	出航したと見せかけた ← 最高の職人を使って工房に閉じ込めてそっくりの枝を作らせた	偽物のできばえと巧みを話術 ← 職人が賃金未払いを訴えられる 皇子は姿をくりました
右大臣安部御主人 ← 火鼠の皮衣 (中国の燃えない布)	財力にたよる ← 中国貿易商「王慶」に捜させ、送らせた	焼けないはが燃えた ← 本物だと思い込んでたので落胆して帰る
大納言大伴御行 ← 竜の首の玉 (竜の首の五色の玉)	家来に捜しに行かせる ← 家来に逃げられ、自分が出航するが暴風雨にあう	九死に一生を得る ← 腹はふくれ、目もはれ寝込む かぐや姫の家の近くも通れない
中納言石上麻呂足 ← 燕の子安貝 (燕の巣にある安産のお守りの貝)	ツバメの巣を見つける ← 籠に乗って貝を取ろうとした	籠から転落 ← 腰を強打・けがが元で死んでしま う、かんだものはフン

さらに暗唱に挑戦

便覧から学ぶ…自分で探そう

①月の異名

②春の七草

③秋の七草

④十二支

⑤いろは歌

便覧から学ぶ…有名作品の冒頭に挑戦

二十七ページ 古事記

四十一ページ 伊勢物語

四十八ページ 土佐日記

四十八ページ 更級日記

四十九ページ 源氏物語

五十ページ 枕草子(春はあけぼの)

五十五ページ 方丈記

六十八ページ 平家物語(祇園精舎)

七十四ページ 徒然草(つれづれなるままに)

八十一ページ おくのほそ道(「旅に死せるあり」まで)

九十ページ 川柳六句

『竹取物語』 暗唱スキルアップ プリント

一年組番

」

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使いけり。名をば、さぬきの造とをむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光たり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

◇暗唱するとき気をつけたい点を書こう。

◎友達に暗唱を聞いてもらい、評価してもらおう

A(よくできた) B(できた) C(もう一歩)

名前	歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して音読している	意味の切れ目に注意して音読している	はっきりと正しく音読している	感想
自己評価	A・B・C	A・B・C	A・B・C	
	A・B・C	A・B・C	A・B・C	
	A・B・C	A・B・C	A・B・C	
	A・B・C	A・B・C	A・B・C	
	A・B・C	A・B・C	A・B・C	

『竹取物語』 暗唱パワーアップ プリント

一年組 番

「

☆学習を振り返り、次の観点について自己評価をしよう

A(よくできた) B(できた) C(もう一歩)

観点	自己評価
歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに正しく直し、はつきりすらすらと音読した。	A・B・C
言葉のリズムや響きを感じながら、音読・暗唱した。	A・B・C
古語の意味を正確にとらえ理解した。	A・B・C
『竹取物語』の内容を理解した。	A・B・C
『竹取物語』のおもしろさを、わたしたちと異なるところ・変わらないところについて話し合った。	A・B・C

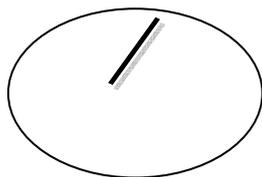
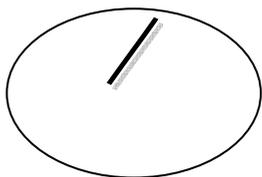
『竹取物語』の学習を通して学んだことは…

暗唱に挑戦

組	名前
---	----

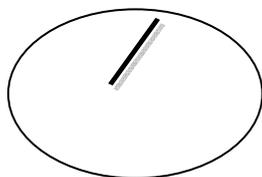
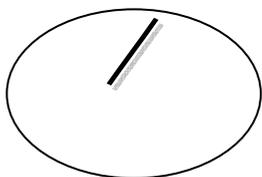
川柳に挑戦!!

児の飴食ひたることに挑戦!!



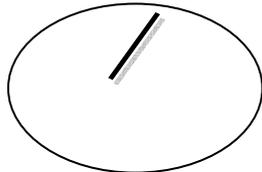
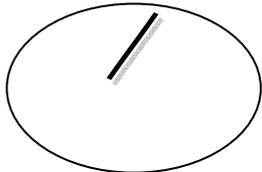
矛盾に挑戦!!

柿山伏に挑戦!!

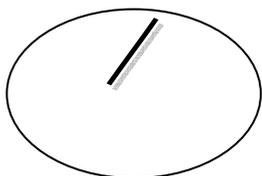


竹取物語・冒頭

かぐや姫の昇天



天の羽衣

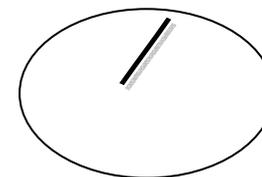
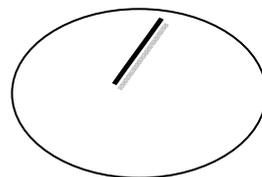


暗唱に挑戦

組	名前
---	----

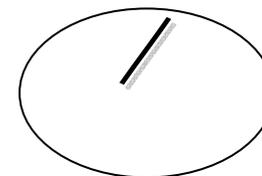
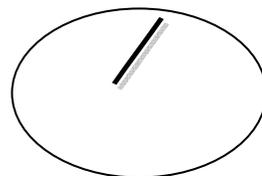
川柳に挑戦!!

児の飴食ひたることに挑戦!!



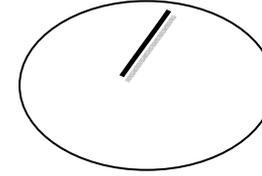
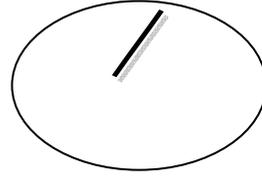
矛盾に挑戦!!

柿山伏に挑戦!!

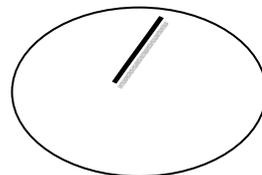


竹取物語・冒頭

かぐや姫の昇天



天の羽衣



暗唱に挑戦

組	名前
---	----

感想

暗唱に挑戦

組	名前
---	----

感想